
竜の人～伊地知竜右衛門異聞～

谷津矢車

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竜の人～伊地知竜右衛門異聞～

【NZコード】

N6841X

【作者名】

谷津矢車

【あらすじ】

明治初期、大阪にて政務を執る大村益次郎は、なんとはなしに昔の雑記帳を広げる。そこには、かつて共に戊辰戦争を戦った薩摩の伊地知竜右衛門の姿があつた。伊地知を懐かしく思った益次郎は、伊地知を大阪にまで呼び出す。久々に現れた伊地知はかつての名将・伊地知のままで現れた。しかし、大村はどことなく違和感を感じていた。その違和感の理由を探るうち、二人の会話は戊辰戦争の分水嶺、白河戦争へと至るのだった。

風が部屋に吹き込んでくる。梅雨も明けてしばらく経つ。いつしか風から湿気が消え、夏の匂いが代わりに混じつっていた。

畳の上に絨毯を敷きその上に洋机や椅子を置いた、急^{いそ}いしらえの執務室。東京から運ばれてくる様々な書類、そして洋書の山が部屋の隅に溜まっている。だが、風はその紙の山をあざ笑うかのように、パラパラと弄ぶ。風にいたずらされた書類たちは机の上で盛大に広がる。

明治新政府の兵部省兵部大輔・大村益次郎は、風に遊ばれてしまつた机の上の書類をまとめ直し、また思い出したかのように目を通して始めた。

芳しくないようだな。

広い額の汗を払いながら、大村は一人ため息をついた。

その書類は大村の意を受けた部下の報告だった。部下の伝える東京の明治政府の内情は好ましい状況とはいえない。どうやら、薩摩の大久保利通が日増しに発言力を強めているようだった。わずか半年ほど前の戊辰戦争の際にはまったく武働きがなかつた男だが、何せ政治が上手い。いや、謀略と言い換えてもいい。気づけば明治政府内に隠然たる影響力を敷こうとしている。

まあ、いい。

大村は机の上に報告を投げ遣る。

大久保の肚は分からぬ。もしかしたら、明治政府を私物化せんとする算段があるのかもしない。だが、あの男はそこまでの男だ。明治政府を支配こそすれ、明治政府そのものを否定するような輩ではない。

大村は椅子を立つた。開け放たれた障子から縁側に出て、夏色の深い空を見上げた。少し遠くに蝉の声が聞こえる。ジワジワと鳴く

蟬たち。思えば、一年前、奥州で戦をしていた頃にも同じく蟬が鳴いていた。蟬からすれば、人間の戦など知つたことではないのだろう。そう思つと、今の憂慮が取るに足らないものに思えてくるから不思議だった。

ある意味で、俺も同じようなものだな。俺は俺で、東京の事など知つたことではない。

大村は我が身を嗤う。

大村益次郎。後に明治維新の立役者と謳われる四雄藩、長州の出身。長州派志士の維新における勲等一位が桂小五郎だとするなら、大村は第二位に位置するだろう。

元は蘭学を学んだ長州の村医者であった。が、蘭学の心得があることから西洋の兵学に触れるようになり、いつしか医者としての働きよりも、西洋兵法家としての名が知られるに至る。その大村を見出したのが桂小五郎である。長州藩の重鎮・桂の信任を受けた大村は奇兵隊を始めとした長州藩兵たちに西洋兵法を教え込む。大村は学者としての才を見込まれた。

普通学者という生き物は机上の空論ばかりで実際には役に立たないというのが相場だが、大村益次郎はむしろ実際の現場で輝いた学者であった。大村が指揮を執った戦には負けがない。必ずしも優勢だった戦いばかりではない。だが、その戦のどれも、まるで千里眼のごとき先読みと神がかりめいた軍略で対する敵を破つてきた。その功が買われ、戊辰戦争の折には事実上、官軍の総督となつた。西洋諸国が目を光らせる中、長引かせるわけにはいかない戦争だったが、一年弱で全てを収めてしまつた。

「その才氣、鬼の如し」

大村と同郷の蘭学者の言葉である。

そのような大村に、明治政府が文官としての道を用意するはずもなかつた。

兵部省兵部大輔。兵部省とはその名の通り、日本の軍を司る省として発足した省である。そして兵部大輔とは兵部省のトップである

兵部卿の下で実務を行なう次官に当たる職である。だが、大村の上に立つ兵部卿は親王であった。つまり、名目だけの兵部卿。事実上、大村が兵部省の最高責任者であった。

ともかく、ずっと武働きの中に身を置き、軍の帳の中で心算を磨いてきた大村とすれば、大久保など大した問題ではなかつた。

あれは、文官だ。

そんな意識がある。

俺は武官だ。大久保とは関係ない。よしんば大久保に何を言われたとしても関係ない。大久保が政府で力を持とうが、武官である俺には関係がない。

大村は今、大阪にいる。

「大阪の軍備を増強すべし」。そう大村は発言した。日本のはば中に立地する大阪。そこに軍の本営や軍の工廠を置く。未だ国力はついておらず、当面日本は専守防衛に努めなくてはならないが、そのためにも大阪に大隊を置きたい。大阪は陸運においても海運においても他の都市に比べ優位がある。大阪を日本防衛の一大拠点としたい。

まごうことない正論、まったく破綻のない理屈である。自分を見出した同郷・木戸孝允（桂小五郎より改名）の支持も取り付け、その準備の為に一人大阪で兵部大輔としての任についている。

だが、これは大村の言い訳だった。

色々と理屈は付けてみたが、結局のところは中央政府の文官連中と関わるのが面倒だつた。戦を知らない文官が、こちらのやることに口を出していくのが我慢ならなかつたのだ。しかも、文官どもの言つことは常に「予算」だの「実現可能性」だのといった軍事とは関係のない話題だ。軍事、殊に防衛に関しては、実現可能性がどうの、メンツがどうのなど、発言すること自体が馬鹿馬鹿しい。武器を持つた暴漢が目の前に現れたとき、メンツが潰れないようにと刀を抜かないバカがどこにいる？ 防衛は、少ない予算をどうにかやりくりしながら、なんとか実現しなくてはならないものなのだ。

だが、文官どもはあれこれと注文を付けてくる。

馬鹿馬鹿しいにも程がある。

そんな文官どもから離れる意味もあり、大村は大阪行きを主張したのであった。

空の向こうに、立ち上る入道雲が見える。

真っ白な入道雲を見上げつつ、大村は苦々しげに咳く。

「戦を知らぬ馬鹿が、軍事を語るな」

くるりと踵を返した大村は、まだどっかりと椅子に腰をかけた。そしてまた部下の報告に目を通そうとしたが止めた。どうせ文官どもの狭い了見が命令という形で書かれているだけなのだろう。見る価値など無かつた。ふと、部屋の隅に掛けられていた鏡に目を向ける。そこには自分の真っ赤な顔が映っていた。つながつている太い眉毛、広い額。

この異相のせいで、長州時代には「火噴き達磨」とあだ名を付けられた。特に、興奮して顔を真っ赤にして檄を飛ばすさまが「火噴き達磨」だったのだろう。

懐かしかった。思わず大村は噴き出した。

だが、そのあだ名をつけてくれた男ももうこの世の人ではない。気づけば本当に戦・軍がなんたるかを知っていた者たちは早々に逝ってしまった。特に、長州の人士たちは、維新を見た者たちも、気づけば軍事から足を洗い、文官として政府に奉仕していた。今にして思えば大村を火噴き達磨と呼んだ男も、いけ好かない男ではあったが戦のなんたるかを知っていた。

皆、行き詰つてしまつた日本の天を回すために戦い、死んでいった。そして維新回天の後、天下には武に生きる者がすっかりいなくなつてしまつた。

あの頃はよかつた。

報告書から目を外した大村は、その横に置いてある和綴じの冊子をぱらぱらとめくつた。公的なものではない。大村がことあるごとに書き遺している雑記のために使つてゐるものだ。未だ維新が成る

前、米国人のヘボンという人に師事していた頃、そのヘボンから最初に教わったことだつた。「日本では公の為に日記を残しているようだが、私の為に雑記を残すべし」と。その理由についてヘボンは、母國の言葉である英語にてこう続けた。「君たちはいつか責任ある役職につくようになる。その際に、自分の発した言葉にも逐一責任が降りかかる。自分のすべての言動を記録しておきたまえ」。実にその通りだ。大村が頷く横で、なぜか悪戯っぽく相好を崩したこの米国人はさらに続けた。「それに、日記は君たちの人生の財産になる」と。

大村はその師・ヘボンの教えを半分守つた。

それ以来、確かに雑記を付けるようになつた。ことあるごとに自分や相手の発言を書き留めるようになつた。だが、その発言たちを体系的に保存する事をしなかつた。別に特段の理由はない。他意もない。

だが、大村は時折、ヘボンに感謝することがある。

雑記帳には自分の忘れていた事実が並んでいる。自分はそんなことを言つたか？あの時、あの人はあんなことを言つたのか。雑記帳を開く度に新たな発見がある。そしてそれは、こうして執務のほんの一時に、僅かながらの潤いを与えてくれる。ヘボン師の口にした「財産」とはこういうことなのだろうか。大村は時折考える。

雑記帳には様々な言葉が並んでいる。数年前からつけている言葉たち。ありありと昔を思い出す。そうやって文字になつてみると無味乾燥なものだが、読み返してみると往時の思いが蘇る。柄にもなく頬を緩めながら何とはなしにページをめくつていく。

と。

「む？」

大村の手が止まつた。

「なんだ、これは」

思わず一人ごつ。

雑記帳の中、色々な人物の発言たち。そのどれもありありと思

い出すことが出来る。元々が俊英・記憶力はいいのだ。文字として残つていればすぐに思い出せることばかりだ。

にも拘らず、雑記帳の上に踊るその言葉について、まるで何も思い出せなかつた。

雑記帳には、こう書かれていた。

“ 敵の弾丸 まるで当たらぬ達磨殿。 じやつどん味方の弾丸は容易く当たります 伊 ”

【2】

誰かの発言のようだ。それに、前後に書かれている他の人物たちの発言からして、一年前の戊辰戦争の緒戦、鳥羽伏見の戦いの際の物であることは容易に分かった。それに、『じゃつどん』という薩摩言葉からして、発言者が薩摩の人間だということも分かった。そこまで分かつていながら、さっぱり状況を思い出せない。うむ？

小首をかしげても思い出せない。

言葉の末期にあつた「伊」という一文字、これだけで思い出すことになりそうだった。この末尾の一文字は、時折大村が残すもので、発言者の頭文字を取つていることが多い。

その伊の字を見てもなお、思い出せない。

「誰だ？ これは」

だが、分からぬままというのも気持ちが悪い。執務そつちのけで、戊辰戦争当時の資料を漁り始める。部屋の隅に山積みになつている書類の山。未だ戦後処理中の為、戊辰戦争の資料は比較的取りやすい処に山のようになつっていた。その書類をひっくり返してすぐ伊の頭文字を持つ男の名前が目に止つた。そして、その発言を取り巻く状況もまた芋づる式に思い出した。

時は約一年前、戊辰戦争の緒戦・鳥羽伏見の戦いにまで遡る。

その前年、慶応三年に徳川幕府は朝廷に大政奉還を行なつた。かねてより朝廷に働きかけ、武力倒幕を画策していた薩摩の動きを掣肘するための措置であつた。事実薩摩はこの大政奉還を受けて、一時は武力倒幕を諦めたほどだつた。が、結局朝廷に対する徳川の影響力を排除できないとして、薩摩は朝廷から倒幕の密勅を引き出すことに成功する。

そして、慶応四年正月、遂に薩摩と旧幕府軍の間で戦端が開かれ

たのだった。

この鳥羽伏見の戦いに、大村は 長州は 、殆ど参加していない。というのも、戦端が開かれた当初、朝廷内部にさえ、この戦いをどう扱うべきか紛糾があった。あくまで薩摩による徳川討伐を追認する意見もあった。そのゴタゴタの為に、結局長州が戦闘に参加したのは鳥羽伏見の緒戦の大勢が決まり、朝廷として正式に徳川慶喜を朝敵として認定した、一月七日以降だった。

それは、一月の八日のことだった。

大村益次郎は一隊を率い、大坂城に向かっていた。数は五百。その前日、大坂城に居たはずの徳川慶喜はわずかな側近を引き連れて大坂を脱出し、海路江戸に向かっていた。それを受け、旧幕府軍の士気は大幅に落ち、旧幕府軍の士卒たちは江戸や自分たちの国へ退却を始めていた。徳川慶喜が陣を張っていた大坂城でも例外ではなく、七日の段階で殆どの旧幕府軍は大坂から離れようとしていた。大村に任せられた任務は、殆ど空城同然の大坂城を占領することだった。

確かに、大勢は決まった。だが、指揮系統が崩壊し、統制の効かないこういう時こそ小競り合いがある。行軍の途上、丁度鳥羽伏見の戦いで激戦だった辺りで、大村率いる長州軍はたまたま退却するところであつた旧幕府軍の一団と出くわした。距離は四半里ほど先。せいぜい数は五十。大勢の決した戦、その敗残兵。別に長州軍が構うべき相手ではなかつた。追撃などする気はさらさらなかつた。将のいない敗残兵を追うことほど馬鹿げたことはない。弾丸の無駄遣いだ。

だが、戦というものはままならないものだ。

長州側の兵が、発砲してしまつたのだった。

行軍中、出会いがしらに敵を見つけてしまい、軍が浮足立つてしまうことがある。将が命令を下す前に士卒が行動してしまい、思ひもよらぬ戦闘になることがある。この状況はまさにその典型だった。

戦う意味もない、無駄弾丸食いの小競り合いが始まってしまった。使われたまま所々に放置されている防墨に身を隠して指示するのが精いっぱいだった。突然敵と出くわして浮足立っている兵たちは、その防墨に身を隠しながらも命令も統制もなく弾丸を撃ち始めた。それに応じる形で、旧幕府軍の兵たちも発砲を始めた。弾丸の風切り音、発射の間隔からして、相手の兵器は火縄銃、あるいは旧式のゲーベル銃であることは見え見えだった。こちらの兵装はミニエー銃。ゲーベル銃と比べてはるかに命中率に優れる。数でも勝つている状況、負けるはずがない。

だが、如何にせん統率がとれない状況。皆突然現れた敵を過大に恐れている。あまりにまずかった。

ち、仕方あるまい。

防墨に身を隠していた大村は、ひょいとその上に立つた。弾丸が飛び交う小競り合いの中、である。周りの制止も聞かずに。

長州藩兵たちは一瞬撃ち方をやめた。皆の視線が大村に集まる。大村は叫んだ。

「安心しろ！ 弾丸になどそは当たらん！ それに怖いのは相手も一緒だ！ 慌てずに事に当たれ！」

これには大村の読みがあった。四半里も離れている状況で、旧式のゲーベル銃に狙撃される確率などほとんど零だ。流れ弾すら当たることはあるまい。だが、この場面でそれを説明したところで分かれはないだろう。そう判断した大村は、我が身を実例にして防墨の上に立つたのだ。

自軍に向いていた大村は相手を睨んだ。四半里先にて展開する、わずか五十の敗残兵。

そして。

「恐れず、果敢に撃て！」

采配代わりに刀を抜いて前を指した。

大村益次郎にはそういうところがあった。学者にはない豪胆さと苛烈さが、ある意味でこの男の強みだった。

と。

不意に、歌のように節のついた言葉が大村の耳に入った。

「敵の弾丸、まるで当たらぬ達磨殿」

がちや。背中に冷たいものを突き付けられているような感覚に襲われる大村。

「じやつどん、味方の弾丸は容易く当たります」

聞いたことのない声色だった。とても軍中で聞くとは思えないほど、穏やかな聲音。少なくとも、自軍の者たちではない。しかも、その独特的の訛り、これは薩摩の言葉だ。自軍に薩摩の者はいない。皆長州の者たちだ。

なに?

思わず振り返る。

防墨の下には、見慣れない風体をした男が立っていた。

背の高さは五尺ほど。痩せこけた犬のような手足をしている。薩摩軍揃いの黒い軍服を身にまとっているが、その左腰には短身瘦躯に不似合いの豪壮な大小を差していた。いわゆる、薩摩拵の刀だ。肌の艶や皺の数からして、殆ど大村と年齢が変わるまい。

だが、大村の目に留まったのはそんな些細なところではなかつた。その男は左目に眼帯をはめていた。さながら講談で語られる柳生十兵衛のように、刀の鐔で左目を隠し紐で結んで眼帯を為していた。右手にて杖をついてその場に立つていた。どうやら伊達や醉狂で杖をついているわけではなさそうだった。その男の体重は、確かにその太い杖によつて支えられていた。

そして、何より。その男は、残つた左手にミニエー銃を持ち、その銃口を大村の背中に突き付けていたのだった。

その眼帯男はつまらなそうに口を開いた。

「浮足立つた軍を身一つで鎮めるその才氣、お見事にござります。じやつどん、お前はんはこの軍の指揮官でござはんか? 大事な御身、せいぜい大事にするが良かど。さつさとその墨から降りるが良かど」薩摩の連中とは何度も話したことがある。薩摩の言葉は崩れに崩

れていて意味が取れないことが多い。だが、耳で聞いた言葉はたとえ聞き取れないところがあつたとしてもどうにか意思の疎通がはかれる場合がある。正直、あまり薩摩言葉に慣れておらず意味のほとんど分からなかつた大村ではあつたが、その言葉に善意めいたものを感じた大村は、唯一聞き取れた言葉に従い防壘から降りた。

「……あなたは一体何者だ」

大村の言葉を塞いで、眼帯男は笑う。

「敵に見えもすか？ おい俺は味方でござる」

その眼帯男は大村に撃ち方をやめるように言つた。なぜ？ 大村が訊くと、眼帯男はまた笑つた。「同志討ちは禍根を残しもす」と。言われた通りに撃ち方をやめさせた瞬間、眼帯男はコツコツと杖をついて何歩か歩を進め、左手のミニエー銃を天に向かつて撃ち放つた。

と。

その瞬間、左翼で鬨の声が上がつた。

なんだ！？ 大村は左翼を睨む。

そこには、薩軍の旗を躍らせた一軍が控えていた。数は百ほど。だが、竜がいなないているが如きその音声おんじょうが、辺りの空気を揺らした。

天に向けていた銃口を敵軍に向けた眼帯男。

ふん、と息を吐いた。

「地軸の底まで叩つ斬りもせ！」

眼帯男が叫んだ瞬間、離れたところにいた薩軍が動いた。男の声が届いているわけはない。だが、まるで眼帯男の命を受けたかのように自在に動く。獣のような声を上げて殺到する一団五十。そしてその援護射撃に回る後方支援五十。援護射撃の弾幕は收まりそうもない。もしかすると、長州と同じ最新型の元込式連発銃を装備しているのかもしれない。

だが、何より目を引くのは呐喊とうかんする歩兵の方だ。

銃口を前にして、まるで恐れるところを知らない。別に呐喊兵た

ちは鎧に身をまとつてこるわけではない。恐らくは眼帯男と同じく
揃いの軍服に違ひない。

【3】

にも拘らずああして蛮に呐喊できるところとは、よっぽど自分の腕を恃みにしているか、あるいは後方の支援隊を信頼しているか。そのどちらかだ。いや、あるいは両方か。

たかが百。だが、明らかに孕む空気に暴が混じっている。

その空気に圧されたのか、敵軍は恐慌をきたしたようだつた。最初は多少の反撃を見せていたものの、呐喊兵たちが近づくにつれ、一人、また一人と持ち場から離れていく。遂には敵軍全員がまさに蜘蛛の子を散らすようにして退散していった。

どうやら薩軍に損害はない。それどころか、敵軍にさえ損害はない。

呐喊兵たちは逃げていく兵たちを追わない。総員が去つたのを見届けるや、さつきまでの怒涛のような進軍を止め、後方支援隊に合流していった。わずか百人。だが、一糸乱れぬ用兵。何より、司令官の意思を見事に体現した用兵と言える。

犬の喧嘩で言えば、牙を突き立てるまでもなく、吠え合いだけで勝負が決したと言つてもいい。

ふう。一人満足げにため息をついた眼帯男は四散していく敵軍を眺めながら頷いた。

「何処の家中の者かは知りもはんが、生きて帰るのが何よりでごわす」

大村が茶々を入れる。

「ほう、武人が敗残兵の心配とはな」

「その口ぶり、心配してはまずいような言い方でごわすな」

眼帯男の言葉の響きには、豪壮な薩摩訛りには似合わない哀調があつた。この男の独眼には、大村に映らない何かが見えるようだつた。

まあ、いい。俺には関係のことだ。

大村は頭を振つた。

「お恥ずかしいところをお見せした」

「うむ？ 何がでごわすか」

「敵に接遇し統率が乱れるなど、二流のやることだ」
大村の本心だ。そもそも戦といふのは相手と戦闘をする行為である。如何に勝ち戦であれ、行軍中であれ、戦の最中ということはいついかなる場面においても戦闘状態になる可能性があるということだ。「突然敵が現れたから」などという言い訳は通用しない。軍略家、しかも家中随一の用兵天才の名を欲しいがままにした大村からすれば、この失敗は恥辱でしかない。結局のところ、一軍の失敗は司令官の失敗なのだ。

だが、眼帯男はその大村の言葉を笑つた。

「真面目なお方でごわすなあ。まあ、この状況で気が緩まんほうがどうかしていると俺は思いもすが」

不思議な男だ。大村は思う。

普通一軍を率いる将はどこか野蛮な空氣を孕んでいるものだ。軍を動かす人間は、常に味方の士氣を高めるために居丈高な態度を取る。そうして軍人は野蛮に磨きがかかるものだが、この男にはその色がまったくない。むしろ、どこか学者然とした雰囲気さえある。

だが、眼帯男は次の言葉で大村の持つた印象をひっくり返した。「じゃつどん、お前まはん、少々軽率なところがあり申す。墨の上に立つあれなんぞは、まさにその典型でごわす」

思わず反論しようとしたが、大村は口をつぐまでは居られなかつた。目の前にいる眼帯男は、味方であるはずの大村に対して殺氣にも似た氣を放っていた。まるで獰猛な獣が獲物の喉首を狙つているかのような独眼。短身瘦躯、独眼、杖をついて足を引いている男から発される威圧。ふと、大村は額に汗をかいていることに気付いた。一月、冬に。

「戦というのは何が起こるか分かりもはん。じゃからこそ、軍略家

があるのでは」わはんか？ その軍略家が、鉄砲の弾丸が飛び交うところに飛び出すというのは、職務の放棄では」わはんか？」

「……相手の銃はゲーベル銃。あの距離ならば当たる確率は一分にも満たん」

「が、当たる確率はあるいつとで」わす。自分の命を大事になされた方が良かど」

田の前の眼帯男は一步も引く氣がない。滲み出る威圧が全てを物語つていた。

「こちらが折れるしかなさそうだった。
仕方なく、大村は頭を下げた。すると眼帯男はニッと相好を崩した。

「おつと、軍略の事となると、どうも熱くなりもしていかん。あまりお氣を悪くなされんでくれもんそ」

そのどこか人懐っこい笑みに、さきまでの厳しい表情が消え去ってしまった。軍を自在に操るのみならず、この独眼の戦略家は自分の感情さえ自在に操るらしい。

どこかその笑顔にほだされながらも、大村は口を開いた。

「申し遅れた。拙者は長州軍」

「ああ、そげんな紹介は要りもはん。お前はんが誰か、知つてあります。長州の大村益次郎殿。いや、火噴き達磨殿とお呼び申した方が良かど？」

なぜ俺の名を？ だが、その問いを聞く前に、眼帯男はのつそりと踵を返した。足のせいだろうか。

「俺はもう行きもす。旧幕府軍の追討がありもすよつて。 これから戦、よろしく頼みもす」

「コソ、コソ。

右手にある杖をつきながら、眼帯男は一步一步と歩を進めた。右足を引いてはいるが、その歩みにそこか近寄りがたい威圧を放つていてるのがあまりに不思議だった。

「ちょっと待たれよ！」

呼び止めると、眼帯男はゆっくりと振り返る。

「何で、ごわすか」

「御家名と御尊名を賜りたく」

しばらくの間、沈黙。眼帯男は不思議そうに首をかしげるばかりだった。だが、ふう、とため息をついたのをきっかけにして、眼帯男は口を開いた。

「俺か？ 俺は、薩摩家中・軍奉行の、伊 」

ああ、なぜ忘れていたのだろう。

雑記帳を見つめながら、大村は一人呟いた。

なぜ俺は、あれほどの男を忘れていたのだろう。いくら考えても分からぬ。

あの男はまさしくとなき戊辰戦争の勲一等だ。無論、自分も明治政府の総督、つまりは政府軍の最高責任者として様々な戦に参戦した。中には自ら計画を立てて一日のうちに終結させた戦いもあった。勲一等は自分だという意識が益次郎ないと言えばそれは嘘になる。だが、もしあの男が明治政府側にいなかつたならば戊辰戦争はまた別の様相を呈していただろう。勝つには勝つていただろうが、恐らくは明治政府側の犠牲者がさらに増えていることだろう。内戦状態が長引けば長引くほど、他国から内政干渉を受ける可能性があつた。開戦の際、列強各國は傍観の構えを取つたが、それとていつ翻るかは誰にもわからなかつた。恐らく、慶応四年／明治元年ほど、綱渡りな年はなかつたろう。

あの男は薩摩閥だ。

薩摩の巨魁・西郷隆盛や大久保利通、小松帯刀といった曲者たちに列する男である。

が、最近とんとその名前を聞かなかつた。

薩摩に限らず、先の戊辰戦争で名だたる功績を上げた將軍や士卒たちは兵部省に入った。あの男とて例外ではないはずだった。だが、いくら兵部省の名簿をひっくり返してもあの男の名前はない。あれ

だけ功績を上げたにも関わらず、かの男には未だ役目が下されていないようだつた。

それを知つた大村は、東京の部下に向け危急の手紙をしたためた。普段ならばこまごまとした命令を紙にして何十枚にもして下す大村だつたが、この時ばかりは僅か紙ペラ一枚の命令であつた。

その命令書を書き終えた大村は、一人執務室で、あの男の名前を

呼んだ。あの、薩摩の独眼竜の名前を。

「伊地知竜右衛門」

その顔は火噴き達磨のあだ名の通りすっかり赤く染まつていた。だが、大村がそれに気づく由もなかつた。

夏は暑い。去年、戊辰の夏と同じく。人の営みなど関係ない。

命令書を発してから一週間。

大阪の兵部省兵部大輔・大村益次郎の執務室を訪ねる者の姿があつた。

その日も大村は執務室にて東京から届く書類の整理を行なつていた。東京でやればいい執務をわざわざ大阪でやるということは、それだけ気苦労も多い。送られてくる重要な案件書類も一週間遅れてやつてくる。如何に文官どもと距離を置きたいからとはい、一週間前の政府内の紛議を見せつけられるのにはさすがに辟易としていた。書類の一枚一枚に目を通してはサインを書いていく単調な作業に倦み始めていた頃、その来客は執務室の戸を開いた。

何の声もかけられずに開かれた戸を、書類から目を離さずに大村が咎めた。

「おい、挨拶もなしに入つてくる奴があるか」

「はつは」大仰な笑い声。「じゃつどん、いきなり“大阪に来い”と催促するは、いくら天下の兵部大輔殿と雖も無礼じやなかど？」
懐かしい声だつた。勇壮で豪放な響きをする薩摩訛りであつても、その奥の方に感じる優しげな声。

うむ？

思わず大村は顔を上げた。

その大村の視線の先、執務室の戸の前には、あの男が立っていた。
和装だった。茶色の上着に黒い袴姿が、細身の体によく似合う。
やはり以前と同じく、その左腰には薩摩袴の大小が差してあった。
一年前に顔を合わせた時と同じく総髪。さすがに眼帯は鍔のもので
はなく、黒布のものに替わってはいた。やはり右手には杖がある。
何も変わつてはいなかつた。

だが、大村は目の前に立つ男の変化を、過敏に感じ取っていた。だがその正体が分からぬ。今日の前にいる男は、あの男によく似た人形なのではないか、そう思つてしまつほどに、その男をその男たらしむ何かが抜け落ちてゐるようと思えた。

大村は椅子から立ち上がり、男の前に立つた。すると、眼帯男はゆっくりと頭を下げた。

「はは、先般のご無礼、平にお許しくれもんせ。じゃつどん、はるばる東京から大阪まで参りました。ちつと位は愚痴の一つや一つは言わせてくれもんせ、総督殿」

はは。さすがの大村といえど、この言葉には笑うしかない。無理を承知で大阪まで来て欲しいと要請したのは大村の側なのだ。

「いやいや、あなたの無礼には慣れているし、そもそもあなたを大阪に呼んだのは俺だ。それに俺はもう総督ではない。気を遣う必要などない」

大村は頭を振つた。この眼帯男の言つ“総督”というのは、先の戊辰戦争における大村の肩書である。もう数ヶ月前に戊辰戦争は終結し、大村の両肩にかかつっていた総督の肩書は消滅している。

だが、男は笑う。

「俺にとつては、大村殿はいつまで経つても総督殿でござわす」なぜだろう、この男にそう言われてしまつと普段ならおべつかだと割り切つてしまつ言葉がいやに嬉しく響く。だが、心の底に響く思いを無理矢理封じて、大村は男を迎えた。

「ようこそ。伊地知竜右衛門殿」

すると、伊地知はぽりぽりと後ろ頭を搔いた。

「ああ、実は俺、その通称はもう捨てもした。今は、正治と名乗つております」

「ショウジ？」

「国を正しく治めるで正治。まあ、昔からこの名前でもしたんだ」伊地知正治。身勝手な言い分だが、その名前はあまりにも目の前の男に不似合いだった。大村にとって、伊地知はやはり“竜右衛門”だった。飛ぶが如くに戦場を渡り、敵軍の腹を爪で裂き、腸をその顎で引きずり出す。伊地知の操る軍はさながら竜のようだった。だが、こんな個人的な感傷を面と向かって伝えるわけにもいかず、大村は伊地知に椅子を勧めた。すると伊地知は嬉しげに相好を崩し、大村の勧めのままに椅子に座つた。大小の刀を帯から引き抜きながら穏やかな笑みを浮かべる。

「総督殿、お変わりないようで何よりでござわすな」

「伊地知殿こそお変わりなく」

「いやいや」伊地知は手をひらひらと振る。「こここのところ、どうも体がなまつて仕方なか。戦のなか時代に槍は不要。戦のなか時代に軍師は不要。俺のように武働き以外に得手のなか人間は、ただ腐りゆくのみござわす」

それが伊地知一流の冗句なのか、それとも本音なのかは大村には分かりかねた。自分の椅子に腰かけた大村は、ただ机越しに対坐する伊地知の顔を見つめた。その表情にはまるで曇りがない。だが、なぜこんなにも晴れやかな顔を浮かべることが出来るのか、大村には分かりかねた。

何も言えずにいると、不意に伊地知はその顔を大村に寄せた。「しかし、こうして暇なおかげで、総督殿とござんとお話しできるんじやから、感謝せんといかんのじゃつども」

伊地知殿、官職が決まっておられぬのか？ そう訊くと、伊地知は「ああ、大久保どんと西郷さんが官職を紹介してくれもはんからなあ」と冗談とも本音とも取れないことを言った。それに加えて「まあ、これまでが忙し過ぎもした故、丁度いい休みでござわす」と言い訳じみた言葉を重ねるのを忘れなかつた。

「で」

不意に、冗談混じりだった伊地知の言葉に真面目な色が入り込ん

だ。

瞬間、大村は悟った。

この男は何も変わっていない。

伊地知竜右衛門は正治と名を改め、明治を生きている。一年ぶりに大村に顔を見せた伊地知からは、昔の伊地知に在ったはずの何かがこぼれ落ちていたように思えた。だが、それは錯覚に過ぎなかつた。ただ単に、伊地知は己の中に飼っている“獣”を隠すのが上手くなつただけだつた。才氣とも言い換えてもいい。ともかく、伊地知を竜たらしめている狂おしいほどの“何か”は、未だに伊地知の中でとぐろを巻いていた。

大村に対する伊地知は、実に涼やかな顔をしていた。優しげに細めていた独眼をいつの間にか大きく見開き、大村を捉えていた。

「何用でごわすか。兵部省兵部大輔殿のお召しの理由は」

恐ろしい。大村は心からそう思つた。

この男は独眼でしかこの世を見渡していないはずだつた。だが、その独眼が恐ろしい。伊地知の問いはもはや問い合わせではない。恐らく伊地知は、全てを見渡した上でこの問いを発している。つまり、この問答すらも伊地知の打つた布石ということだ。

その布石をかわす意味もあつて、大村はあえて本題に入らなかつた。

「はつは、ただ単に、ちょっとお聞きしたかったことがあるだけだ」「聞きたかった、こと？ 如何なことでごわすか」

「先の戦について」

先の戦。つまりは戊辰戦争の事だ。

その言葉を聞いた瞬間、伊地知の表情が凍つた。だが、それは一瞬の事に過ぎなかつた。ふうとため息をついて表情を解凍させた伊地知は、穏やかな笑みを無理矢理その顔に張り付けた。

「おや、面妖なことをおつしやりもすな？ 僕が担当した戦については、既に報告を上げちょる筈でごわす」

「いや、申し訳ないな」大村は頭を搔いて見せた。「どうも俺は文

章で往時の状況を理解できるほど頭が良くないうらしいのだ。あなたの報告、確かに読ませて頂いたが、読んで納得したふりをするよりも、実際に本人の口から聞いてみたくなったのだ

「ほう、それだけの為に、俺は大阪くんなりまでお呼ばれにあったということで『ごわすか』

「はつは、それはないだろう伊地知殿。伊地知殿程の方ならお分かりのはず。実際にあつた戦を研究する事は、兵法の基本。たとえ日本兵法であろうが西洋流の兵法であろうがそれは同じことだろう」結局のところ、軍事学というのは実際にあつた戦から勝利に寄与したであろう様々な条件を拾い上げ、それをデータ化した学問だ。であるからには、様々な実例が欲しい。大村の言わんとすることはすなわちそういうことだ。

しばらくそっぽを向きながら顎のあたりを撫でまわしていた伊地知だったが、恐らくは言い訳の言葉が見つからなかつたのだろう、渋々といった体でこくりと一つ頷いた。笑みの表情は崩さなかつた。「まったく、総督殿には恐れ入りもす。で、何を聞きたいのでごわすか。何を聞いても良かど」

すると、大村は指を一本立てた。

「白河での攻防戦。あの戦をお聞きしたい」

「白河」

伊地知は大村の言葉を鶲鶴返しにした。だが、その鶲鶴返しには焰のような熱が確かに籠つていた。僅か一年前の戦。その熱気がここに蘇つていてるかのようだつた。

その伊地知の心のざなみを感じしつつも、あえて大村は知らぬふりをとつた。

「あの戦は見事だつた。恐らく、あの城はあなただから落とすことが出来たのだろう。もしもあの場面で早期に白河が落ちていなければ、もっと戊辰戦争の終結が遅れたはずだ」

伊地知は曖昧に頷いた。

「まあ、俺の独眼に大局を見る力はありもはん。じゃつどん、恐ら

くはあの戦いが俺にとつて畢生^{ひっせい}の戦となるのではなかか？」

畢生、か。心の隅で大村は呟く。

その言葉にさえ、伊地知の張った布石の影を感じる。かつて長州は、伊地知率いる薩摩軍と一戦交えたことがあつたが、その時に見えず本当に良かつたと心から思った。ちなみにその時、長州軍は伊地知の采配により総崩れといつても差し支えないほどの大損害を負っている。たかが言葉を交わすだけだが、この男との会話は気を抜けない。向こうを張つて戦陣を構えているような錯覚に陥る。

恐ろしい男だ。

大村が心の隅で呟く前で、不意に伊地知は「ただし」と声を上げた。

「お答えしても良かけど、その代わり、総督殿、お一つお聞きしたいことがあります。それに赤心をもつてお答えくれいうなら、俺も先の戦について話します」

交換条件。

仮にもかつての上官に対して交換条件を突きつけるとは大した肝である。だが、伊地知のこの態度の裏には圧倒的な自信と大村に対するある種の信頼が控えている。つまり、「自分がこの男に負けるはずがない」という自信と、「大村益次郎ともあろつ方が、交換条件程度のことでも戻込みするはずはない」という肚が混在しているのだ。何にせよ、一筋縄ではいかない男だ。微笑の裏に、途轍もないものを隠している。

つまり、大村に否の選択肢はない。否の選択肢という退路は既に塞がれている。

とんとんタヌキだな。

苦笑いを浮かべつつ、大村は頷いた。

「いいだろう。約束しよう。ただし、質問の内容によつては他言無用とさせていただくが、それでもよろしいか？ 国の方針に関してのことならば、時として秘密にせねばならぬこともある」

伊地知は不満げに少し眉を吊り上げた。だが、仕方がないことと

割り切つたのか、眉根の困惑を振り払つて頷いた。

「元々俺の胸にのみ留めておくつもりでもした。俺の質問は、あくまで俺が疑問に思つてることでござる。俺の意思で総督殿にお聞きしたいだけ。了解致しもした」

「では、交換条件成立、だな」

「うむ。で、どちらから話しもすか」

「ならば、西洋流の決め方をしよう」

大村は内ポケットからコインを取り出した。イギリス帰りの同郷・井上聞多から貰つたものだ。

大村は説明した。市井で行なわれる西洋将棋やサッカーとかいう玉蹴り遊びの際、先攻後攻を決めたり陣地を決めたりする時に公平を期すために行なう。コインを投げる者とそれを見守る者に分かれ、まず「コインを空中に投げてそれを誰にも見えないように空中で取る。そして見守る者が、コインの表か裏を宣言する。その宣言が合つていれば見守っている人間の勝ち、逆ならばコインを投げた方が勝ち。現代でいう、コイントスだ。

「ふむ……？　どうも想像が出来もはん」

「まあ、やつてみればわかる」

大村はコインの表と裏を伊地知に示し、それからコインを親指ではじいた。くるくると回るコインは大村の眼前あたりで放物線運動の頂点を描いた。回転は止まらない。だが、ゆっくりと上昇から下降に転じたコインは大村の手の中に向かつて落ちていく。

そのコインを空中で取り、手で隠した大村は伊地知に向いた。

「さて。伊地知殿。表か裏か」

「なるほど、こういう趣向でござるか。まるで丁半博打でござるな」と笑つた伊地知は、眼帯によつて隠れぬ目を細めながら、口を開いた。この男らしく、即断だつた。

「裏」

大村はコインを隠す手をどけた。大村の手の中についたコインは裏を示していた。

この勝負、伊地知の勝ち。

敵わんな。一人大村はため息をつく。伊地知には鬼謀のみならず、運まで味方についている将なのか。強いはずだ。

呆れ半分ながらも、大村は口を開いた。

「では、伊地知殿、あなたは選択が出来る。あなたから先に話すか？ それとも、俺が先に話すか？ この賭けに勝つたあなたはそれを選択することが出来る」

しばらく、伊地知は何も言葉を発さなかつた。机の上に頬杖をついて、大村の顔をボケつと見つめるばかりだつた。だが、光を宿さぬ眼帯の奥の脳は、確かに鋭く回転している。対する大村には分から。この男が黙して語らない時、それは鬼謀を巡らしている時だと。その大村の視線をかわすように、不意に伊地知は笑みを浮かべて、つまらなそうに口を開いた。

「俺の質問は後にしてくれもんせ。先に、総督殿の質問にお答えしもんそ」

「そうか」

大村は息を吐いた。

そして、この頃になると、大村の胸中にはある覚悟が芽生えていた。

この男を前に謀略など無駄にも程がある。結局のところ、この男との勝負は鬼謀や深謀のぶつけ合いで決まらない。結局のところは器の比べ合いだろう、と。

面白い。

久々に、大村益次郎の胸中に狂おしく揺らぐ焰が灯つた。何としても、この男には勝たねばならん。

己の中にある修羅の心を将としての理で隠し、大村は続けた。

「では、お聞きしよう。慶應四年四月末から行なわれた、白河城の攻防戦について」

「お答えしもんそ」

その瞬間、二人の間に戊辰の夏が蘇ってきた。

あれは暑い夏だった。恐らくあれ以上に暑い夏はもうやつてこない。大村にせよ伊地知にせよ、立場は違えど同様だった。

大村益次郎の心は戊辰の夏へと向かった。

恐らくそれは伊地知も同様だったろう。

「どこから、お話しもんせばよろしか」

伊地知はゆつくりと、慶応四年の春先の風景を語り出した。

2

慶応四年正月、薩摩と旧幕府軍との衝突から始まつた鳥羽伏見の戦いは拡大の方向に向かつた。最初は“薩摩家中と旧幕府軍との私的小競り合い”との観測すら存在した鳥羽伏見の戦いであつたが、かねてより討幕を主張していた公卿・岩倉具視や薩摩の思惑により、その戦の意味合いがすり替えられてしまつた。薩摩軍と旧幕府軍の戦、しかも何の大義名分のないままに始まつてしまつたはずの戦争が「朝敵・徳川慶喜を追討する戦」へと大義名分を与えられ、旧幕府軍は朝敵と見なされた。徳川家は最後の最後で政治的な駆け引きに失敗してしまつたのであつた。

ともかく、鳥羽伏見の戦いを始めとする緒戦により、薩長土肥を中心とする朝廷軍は一月中に西日本をほぼ手中に收める。堰を切つたかのように飛び出した時代のうねりは止まらなかつたのであらう。そして、その時代の濁流は西日本を飲み込んだくらいではそうそう止まらなかつた。

正月に出された徳川慶喜追討の詔が朝廷軍に大義名分を与えた。

関東に戻り朝廷に対し恭順の姿勢を見せた徳川慶喜だが、そんなことで朝廷軍は止まらなかつた。東海道・中山道に分かれ朝廷軍は江戸に進んだ。そしてその年の三月には朝廷軍は江戸の喉元にまで迫つた。江戸を焦土とする全面戦争の様相さえ呈し始めたが、徳川慶喜が徹底して恭順の姿勢を見せたこと、また慶喜の意を受けた

勝海舟・山岡鉄舟ら幕臣による徳川家の助命嘆願・江戸城無血開城の働きかけにより、百万都市・江戸が戦場になることはなかつた。

徳川慶喜は蟄居処分、徳川家の所領は大幅没収。徳川家は家名を繫いだ。慶応四年三月末の事である。

これを以つて、薩長土肥による対徳川家との戦争は大勢を決した。徳川家の処分が決まつた以上、徳川家を追討する名分であつたはずのこの戦は終結すべきだつた。だが、歴史のうねりは予想だにしない事態を生む。

目を奥州に向けよう。

本来、奥州はこの戦とは関係のない地域であつた。関東よりも東に立地する奥州は、物理的に戦場となるはずもなかつた。また、奥州には親藩・譜代家の大名もあつたが、奥州を治める大名の多くが外様大名である。そもそも、あまり徳川家に對して帰属意識を持つていたわけではない。京都守護職を務めた会津や徳川恩顧の庄内、旧老中・安藤信正の治める磐城平など、幕府に近い立場にある家中もあるにはあつたが、扱いさえ間違えなければ奥州はなんの障壁にもならないはずであつた。

結果から言えば、朝廷は奥州の懷柔に失敗したのであつた。いや、そもそも懷柔する氣すらなかつたのかもしれない。

朝廷側は、会津と庄内を追討する肚であつた。事実、鳥羽伏見の戦いが終わつてすぐ、会津を徳川慶喜と共に朝敵とする詔を発している。

会津の藩主松平容保はすぐに恭順の意を表した。だが、それを朝廷側は認めず、仙台・伊達や米沢・上杉といった外様の大名家に会津追討の命令を下した。

だが、仙台や米沢としてみれば、会津を攻める理由などなかつた。攻める利益もない。仙台も米沢も戦国の昔から天下にあつた名家である。天皇の意思として発されている会津追討の命令だつたが、その背後にある島津や毛利の下級武士どもの命令に従つのが癪だつた部分もあるう。それに、仙台や米沢は、薩長首魁による新政府のこ

とを信じていなかつた。

“会津ほどの名家、しかも先帝の覚えもめでたかつた会津公を虫でも潰すかのように消そうとしている。かの政府に従つてよいものか?”

恐らくは同情もあつたのだろう。仙台は朝廷と会津の間に立ち、何とか中を取り持とうと画策した。会津はもとより恭順の意を示している。松平容保公は既に家督を譲り蟄居している。あとは会津に下される罰の軽重のみだつた。

だが、朝廷側は頑として会津出兵を督促してくる。結局渋々ながら、仙台は会津へと兵を進めざるを得なかつた。その中でも仙台は会津の助命嘆願を模索していた。

その頃には恭順の意を示していた前将軍・徳川慶喜の処分が決まつていて。すなわち、恭順の意を汲み、家名の存続と助命を許したのである。この前例は会津と仙台を大いに勇気づけた。だが、会津に対して、朝廷は恭順の意を汲むことはなかつた。

そして、四月の半ば、奥州仙台に派遣されていた奥州鎮撫の責任者であり、強硬に会津派兵を仙台に迫つていた世良修蔵の責任が仙台兵により捕えられ斬首された。何とか会津の助命嘆願を進めたかった仙台にとって、会津攻めをしきりに命じてくる世良は目の上の瘤だつた。その上、疑心を持った仙台が取り上げた世良が朝廷に送つていた密書には、奥州にさらなる派兵を要請すること、そして奥州の連中は会津攻めに対して消極的であり、奥州は皆敵である、とまで書いてあつた。この世良の密書の内容が知れ渡つた末の措置であつた。

だが、仮にも世良修蔵は朝廷の目代である。

これを以つて、仙台は朝廷と対立することとなつてしまつたのだった。

かくて、この事件をきっかけにして奥州諸家中は糾合し、薩長政府に対抗するべく同盟を組むに至る。これがいわゆる、奥羽越列藩同盟である。

そして、戊辰戦争は“新政府対徳川の戦争”から、また違つべくトルにシフトチェンジして展開されることとなる。

すなわち、明治政府と明治政府のやり方に対し疑惑を抱く奥羽越諸藩との戦いへと。

慶応四年四月二二日。

その日、大村益次郎は江戸にいた。

徳川との全面戦争は既に回避される運びとなっていた。徳川家の武装解除は徐々に進んではいたが、数々の不穏分子や各戦闘での敗残兵が関東中に散らばっており、未だに予断を許さない状況には違ひなかった。政府軍と敗残兵たちによる散発的な戦闘はそこかしこで起こっていた。

だが、それもあと数日で収まるはずだつた。

東海道と中山道を通して関東に入った政府軍に疲弊はない。それもそのはず、中山道の板垣退助軍が甲州城奪取のために小規模な戦闘を行なつた他には、まったく戦闘めいた戦闘はなかつた。行軍に無理はさせていない。

不安といえば、政府軍の士氣のよりどころであった“徳川家の殲滅”が回避されてしまい肩すかしを食つてしまつた感があること、仮にこの出兵が長期化した時に兵たちの士気が保てるか、それ程度だ。

大机を置いた部屋の真ん中で、大村は地図を広げた。大村が注意を払っているのは関東・徳川家の御領知だつた。関東一帯は元々譜代大名家や旗本、あるいは徳川宗家の領地がある地域である。民百姓に至るまで、「将軍様のお膝元」の意識が強い。そういう民たちを頼り、未だに徳川敗残兵たちが関東一帯をうろついている。だからこそ、大村は諸隊に関東一帯の鎮撫を命じてゐる。

その成果は着実に上がつてきている。

例えば、甲州で板垣退助と戦つた、新撰組の局長・近藤勇もこの鎮撫の際に捕まつた。さんざん新撰組に煮え湯を飲まされてきた長州、土佐の士卒たちの士気は随分と上がつたという。

あと、残すは 。

大村は地図上で江戸を指した。

と 。

「おお、大村さん。勉強熱心でごわすな」
何の声かけもなく部屋に大男が入ってきた。でっぷりと太った体
に、特注であろう大きな軍服をまとっている。中肉中背の大村より、
一回りも大きな男。刀は差していない。小耳に挟んだ話だと、随分
昔に怪我を負つてしまい、既に刀を握れる体ではないという。

地図から顔を上げた大村は、その大男に声を掛けた。

「ああ、西郷殿」

大村の前に現れたのは、薩摩の首魁・西郷吉之助であつた。
名を呼ばれると、西郷はいやに嬉しそうに顔を歪めて鷹揚に笑う。
「お前様まささまも随分と仕事熱心な方ぞ。地図とにらめっこして、何をし
ておられたのでごわすか？」

「兵站へいたんの計算です。飢えては戦は出来ません。それに弾丸がなくて
は戦は出来ません」

戦というのは極めて複合的な事業である。軍を動かすための兵糧
や資金の確保、その分配。兵站線の構築。その上に行軍や戦闘行為
が存在する。戦の華は戦闘行為には違いないが、それを支えるため
にも兵站は重要な意味を持つている。

ふむ。

西郷はその巨体を揺らした。

「兵站でごわすか。これだから、総司令官というのはつまらないも
のでごわすな？ 総司令官殿？」

「総司令官はあなたもでしょう、西郷殿」

この戦争は、かなり特殊な戦争と言えた。薩摩長州土佐肥後。ま
た後に参加した諸家中たちが寄り合つて一つの所帯となつたのが新
政府軍である。本来近代的な軍制において、最高責任者は一人と相
場が決まっている。責任の所在が不明となるからだ。だが、今回の
戦争はそうはいかなかつた。薩摩にも長州にもメンツがある。どち

ら出身の総司令官が立つても角が立つ。そのため、薩摩から一人、長州から一人総司令官を出すことになった。結果、薩摩からは西郷吉之助が、長州からは大村益次郎が選出されたのであった。

とはいっても、さらにその上に親王が君臨したので、名田上最高司令官は一人だった。とはいっても、まさか作戦失敗によつて親王に責任を負わせるわけにもいかない。

ともかく、事実上の司令官が一人いるのである。

「うーむ、じゃつどん、総司令官になどなるものではありもはんな？ 暇で暇で困ります」

何を言ひ、思わず反発しそうになるが、心中で抑え込む。

じつやつて俺たちが地図を眺めている間にも、兵卒たちは戦を開している。中には怪我をしたり死んだりする者がある。当り前のことだ。戦争とは相手の兵力を損なう行為である。どんな戦争にだって死は付きものである。事実、各参謀から上げられる報告の中には、戦死者の名前もある。書類の中には在る戦死者の名前はなんの重みもない。だが、いや、だからこそ司令官は必死で戦の図を描かねばならぬはずだ。

のつそりと大村の前に立つ西郷は、そつやつて自分の中の声と戦う大村に向かつて笑いかけた。

「ははあ、大村総司令官殿。お前様は潔癖ごわすな

「何？」

「思つたままのことを言つたまごわす。戦いのは、汚か事、残酷な事を裏に隠しもす。清濁併せ呑まぬ限り、お前様は一国の将の器ごわす」

「……戯言をおつしやりたいだけならば、申し訳ありませんが御退室願いたいのですが。兵站の遅滞は即戦の結果に障りますもので」

「おや、虎の尾を踏んでしまいましたか」

西郷の顔にはまるで反省の色がない。さつままでと変わらぬ顔色を浮かべたまま、大村を見据えている。大村には分かつていて、西郷のこの顔は見ぐびりの顔だ。この男は常に「良きに計らえ」の姿

勢を取つてゐるが、その底で部下や仲間たちの事を冷徹に観察している。

「聞こえませんでしたか？」大村は言葉を重ねた。「御用がないなら、御退室ください」

「おつとつと、忘れるところでございました」

大村の怒氣など知つたことではないかのようすに満面の笑みを浮かべる西郷は、地図の上に踊る関東平野を指した。

「ちよいとこれから戦略について相談させてくれもんせ」

「戦略？」大村は首をかしげた。

だが、その大村を無視する形で、西郷は日本地図の各点を指でなぞつた。関東一帯を制圧しきつた後、政府軍は幾手かに分かれ奥州に侵攻する。そして、会津・庄内を叩く。その余勢を駆つて蝦夷地まで侵攻し、以て日本全土を政府の管轄下に置く。

「ちょっと待たれよ」大村は口を挟む。「なぜ会津・庄内を？」

聞いた話だと、会津・庄内は仙台・米沢に叩かせる予定になつてゐるという。尤も、あまり仙台が会津侵攻に積極的ではないらしい。それは当然の事だ。兵を動かすとなれば相当の資金がいる。それを、これまで何の後ろ盾もないぱつと出の“新政府”なる権力に命令されたところで、即断で行動できるはずもない。しかし、何とか仙台を懐柔してしまえば、奥州の大勢は決まる。政府軍が出張るまでもなく奥州は收まる。

大村としても、会津攻めは仙台にやらせる肚だつた。はつきり言つて、徳川家の打倒が今回の戦の目的であり、大義名分であった。その徳川家討伐は既に終わつてゐる。ならば、あとは終息へと手を打つのが司令官としての役割だ。

にも拘らず、西郷は会津を直接政府軍で攻めようと言つてゐる。西郷は言つた。

「会津は恐ろしかといひでござわす。幕府に近い立場に在りながら、先帝の覚えがめでたいといひござわす。長らく共に朝廷に出仕しておりもしたから分かりもすが、会津の朝廷への影響力は看過できもは

ん

会津公・松平容保はかつて、徳川幕府から京都守護職を拝命していた。かつて尊王攘夷思想が日本中を駆け巡っていた頃、京都の治安が悪化した。それに伴い新設された役職であつた。火中の栗を拾うが如き苛烈な職だつたが、松平容保は至誠を以つて京都守護職を務め上げた。その至誠ぶりに、先帝孝明天皇は分を超えた待遇を用意して応えた。

確かに現在は薩長によつて朝廷は固められている。だが、それはあくまで理と利による結束でしかない。未だ朝廷内には会津に対する親愛の情がある。これから帝を中心とした新国家を打ち立てるに当たり、朝廷内に未だくすぶるそれらの情はなんとしても挫かなくてはならない。そのようなことを西郷は言つた。

「西郷殿、あと、もう一つ理由がおありでしょ？」

「ほう？」

頓狂な声を上げる西郷に向かい、大村は言つた。

「西郷殿は、会津を見せしめにする心づもりなのでしょう？ 今般の戦において、國そのものが滅ぼされた例はありません。本来なら、徳川家をそつするおつもりだつた。徳川慶喜の首を刎ねて徳川家の血を絶やし、その城下である江戸を火の海にすることで、反乱を志向する者たちの意氣を削ぐおつもりだつたのでしょう？」

西郷は何も答えなかつた。

「が、どこかの誰かさんが勝手に“徳川は攻めぬ”と約束してしまつたがためにそれが頓挫し、その矛先を会津に転じた。そんなところでしょう」

痛烈な西郷批判である。勝海舟と会談し、江戸城無血開城を決めたのは西郷吉之助その人だつた。つまり、この発言は西郷の江戸城無血開城の決断に対する当てこすりなのである。

が、西郷は言い訳一つしなかつた。それどころか眉根一つ動かさない。鷹揚な笑みを崩さないまま、その場に立ち尽くしていた。大きな目だけが黒く輝く。

立ち込める不穏な空氣。

だが、西郷はその空氣の中でもなお、口を開いた。

「そんなところで」「わす

居直つた。しかも、笑顔のままで。醜悪な笑みを浮かべたままで。

西郷の低い声が辺りに反響する。

居直り。これほゞやりにくいことはない。特に、大村のようだ。理屈を武器として生きる人間であればなおさらだ。居直りというのは、理屈や道理から口をつぶる行為に他ならない。つまり、どんなに理屈や道理を説いたところで意味がない。理屈を積み上げて勝利図を描き、道理を貫いて將士を展開する大村益次郎にとって、居直られた相手に対してはまるで抗する手段が存在しない。

また一つ、西郷の強さを見たような気がした。

大村は話の方向を少し変えることしかできなかつた。

「ま、それもこれも、『田の上のたんごぶ』を取り除いた後のことでしょうがね」

「『田の上のたんごぶ』？ ああ、彰義隊のことで『わすか』ち、とぼけたふりをしているくせに随分と分かつてゐるじゃないか。肚の底で舌打ちをする。

西郷の話に出た“彰義隊”というのは、徳川家旗本の一部によって結成された武装集団である。徳川家による公的な集団ではない。旗本たちの有志によつて作られた、表向きは上野寛永寺に蟄居していた徳川慶喜の警護を担つていた一団である。だが、徳川慶喜が蟄居の為に水戸に移つてもなお、彰義隊は上野の山に留まり続けた。しかも、最近は江戸近辺の敗残兵や徳川家寄りの志士たちが参加し、既に隊は二千人を超えた。彰義隊は敗残兵たちの受け皿となつてしまつたのである。

徳川慶喜の警護という目的を奪われた、数千人もの一団。しかも、敗残兵たちによつて、旧式とはいえ銃などの武器も集まりつつある。その一団がどう行動するのか、誰にも分からぬ。どうやら徳川家旗本・勝海舟によつて彰義隊への解散勧告が發せられてゐるらしいが、その命に従う様子はないらしい。

「戦の準備をしもんそ？」

「ええ」

十分あり得る。しかも、もし彰義隊と戦ということになれば面倒なことになる。もしも彰義隊が上野山から降りて江戸の町に火を放つたりしたら……被害は甚大なものになる。もしかしたら、江戸という一大拠点を失うという憂き目に遭う可能性すらある。そのようなことを許してしまえば人心が一気に離れる。それに、それではわざわざ無血開城にまで持ち込んだ意味まで無くなってしまう。もしも彰義隊を叩くのならばそれなりに準備が必要だった。江戸の町に被害を与える、かつ彰義隊のみを叩く手が

「その際には、ご協力願います。総司令官殿」

「承知いたしました」

と。

突然声もかからぬままに部屋の戸が開け放たれた。

「馬鹿者！ 部屋に入る時は声くらい」

「ご無礼失礼いたします！ 急告にござります！」

大村の言葉は入ってきた伝令によつて阻まれた。伝令はその場に跪いて、大村に頭を垂れている。すまぬ、続けよ。そう促すと、伝

令は顔を上げて怒鳴り散らすかのように言葉を放つた。

「奥州鎮撫総督府下参謀の世良修蔵様、四月二十日、仙台兵により拿捕！」

「な、なんだと！？」

大村は思わず机を叩く。

世良修蔵は、奥州鎮撫総督府における参謀役である。何より、世良は大村の旧知である。元々奇兵隊上りである世良は、大村の兵法の薰陶を受けたと言つてもいい。それを抜きにしても世良は良い戦をする。奥州鎮撫総督府の同格に薩摩の大山格之助なる者がいるが、これは大した男ではない。一度大村は大山格之助と話をしたことがあつたが、もしも時代の乱氣流によつてここまで上つてきていなかつたならば、恐らく一生を下級武士で終えているような男でしかなかつた。事実、仙台での行軍の途上、軍を統率しきれずに自軍

兵卒たちの略奪・強姦といった乱暴狼藉を黙認しているらしい。そのような男が軍を率いている状況なのである。そういう意味でも、戦を良く知り軍略を知る世良は奥州鎮撫総督府になくてはならない存在であった。

だが、その世良が仙台によつて拿捕された ？
何度も考えた。だが、何度も頭を巡らしても、出る答えは一つだつた。

「仙台が、新政府に反旗を翻した ？」

奥州鎮撫総督府の参謀。つまりそれは新政府の、つまりは帝の代弁者に他ならない。その世良を拿捕したといつゝことはつまり、仙台が新政府に対し一心があるということだ。

「何と、ちょっともた」

西郷も声を上げた。

その声が上がつた頃に、また伝令が部屋になだれ込んできた。それから一刻ほどの間に、矢継ぎ早に何人も何人も伝令が入ってきた。細切れにやつてくる情報たちは、緊迫する奥州情勢を語り出していた。

「二十日仙台兵により拿捕された奥州総督府下参謀・世良修蔵殿、拿捕の際に旅籠の一階から飛び降り、瀕死の重傷を負われた模様！

現在生死不明！」

「二十日仙台兵により拿捕された奥州総督府下参謀・世良修蔵殿、同日仙台・阿武隈川河川敷にて斬首！」

「奥州総督府下参謀大山格之助殿、仙台にて孤立！」

「奥州総督府下参謀大山格之助殿、仙台兵と戦闘！」

「奥州総督府総督・副総督・参謀三名、仙台兵に拿捕！ 軟禁の由

！」

世良が死んだ。しかも、瀕死の大怪我を負つていたにも拘らず、あえて殺を下した。ただ殺すのならば、手当をやめればそれで死ぬはずにも関わらず。まるで弁明の機会も与えないまま問答無用に同日処刑。しかも、武士に与えられるべき名譽刑・切腹ではなく、斬

首。犬猫を殺すかのようだ。

未だ、世良が捕まつた段階では状況が分からなかつた。だが、仙台伊達家中による世良の処遇を仔細に検討すればするほど、事態が重大かつ深刻であることが鮮明になつてくる。

仙台は、新政府に明らかな対決姿勢を示したのだ。

「なんということだ」

大村は頭を抱えた。

「ちつと、厄介なことになりもしたな」と西郷も口にした。「仙台といえば伊達政宗公以来の大家中。確か、石高は六十万石でござつたか?」

「ならば、実高は百万石を超えているでしょ?」

確かに伊達政宗公が神君家康公より知行を賜つた頃には六十万石であつたろう。だが、それ以降も開墾に開墾を重ね、実際にはもつと田畠地は多いことだろう。基本的に農本社会である当時、石高はそのまま国力を指し示す指標となる。

「しかも」大村は続ける。「今、仙台は奥州の家中と盟約を組んでいるようです。元々は会津公の助命嘆願のための盟約らしいですがね。が、仙台が新政府に対して対決姿勢を露わにした。ということは」

「脅かしつこはなかど」悪戯つぽく口にしたつもりだつたろうが、さすがの西郷も口のあたりが少し震えていた。「まさか総督殿、その盟約が、そのまま俺どんの障害になると? 他の奥州家中たちが、俺どんに宣戦布告してくると言いますか?」

「充分過ぎるほど考えられますね」

さすがに眩暈がしてきた。事がここに及んで、仙台家中を向こうに回す。しかも、他の奥州家中たちもそれに呼応しそうな雲行き。会津攻めどころの話ではない。新政府軍はこれより奥州を相手に戦わなくてはならない。

「しかも」大村は言った。「さらに事態は暗転するでしょ?」

その瞬間、また伝令が部屋に飛び込んできた。

その伝令の持つてきた情報は、決定打だつた。

「奥州白河城、二十日夜までに会津により奇襲！ 同日会津軍により奪われました！」

「な……！？」

いかに西郷と雖も、驚愕の顔を隠せなかつた。

だが、仙台が反旗を翻した時点で大村には成り行きの予想はついていた。

奥州白河。磐城国にある地域で、奥州街道沿いに立地する城下町である。古来より、奥州における守りの要として機能してきた。江戸時代には仙台の雄・伊達家や米沢の上杉の南下を警戒する幕府の思惑によって、譜代大名や親藩大名家が白河を管理していた。慶応四年時点では白河城に城主はおらず、徳川家の直轄地となつていた。奥州街道に接している。その上、立地的に考えると白河は奥州の入り口であり、関東との境として機能してきた。奥州に攻め上ろうとするのならば白河は必ず通過せねばならない地である。そして奥州を防衛しようとすれば、接收・封鎖できればほぼ確実に敵の進軍を阻むことが出来る地である。新政府にとつても奥羽越の国々につても白河は要衝の地であつた。奥州の喉元であると同時に、関東の急所にもなりうる。それが白河なのである。

だからこそ、奥州鎮撫総督府はいち早く白河城を接收した。

だが、その下参謀・世良が拿捕・処刑されたことにより、奥州鎮撫総督府の機能が麻痺した。その間隙を縫つて、会津は白河を奪取し返したのであつた。

「なかなか、面倒なことになりましたな」

大村の呴きに西郷は同意した。

「まこと面倒なことになりました。じゃつち、世良が殺されたのと同じ日に奇襲攻撃とは。仙台と会津が一脈通じていたとしか思えもはんな」

「しかも、さらに面倒なのは」

大村は地図の上に指を踊らせた。その指先は奥州・白河を指す。

「もしも、奥州が旧幕府軍の残党どもと呼応し始めたたりどうなるか。
例えば、江戸の彰義隊と奥州の諸家中が同時に蜂起などしたら」
「ううん、そんなことはないよ。」

新政府軍は正面作戦を展開するしか手がなくなる。無論、彰義隊と奥州各家中だけが相手ならば現在の兵力でも何とかなる。が、この様を見た日本中の家中がどう行動するかは誰にも分からぬ。確かに新政府軍は西日本を既に支配下に置いている。だがそれは、新政府軍に風ありと踏んだ諸家中がこちらになびいているだけの事だ。もし風向きが変わつたと踏まれれば、一気に情勢が変わる。負けることはあるまい。が、この戦争が泥沼化することになる。

泥沼化すれば、今は傍観に回つてゐる西洋列強がどう動くか。

一人して、固唾をのむ。本当に唾が固い。

「……大村どん、どうするべきでござわすか」

「決まつています。白河を即刻奪い返すしかないでしょう」

「じやつどん大村どん、現在各軍は関東の残党狩りに手を焼いている状況にござわす」

それは大村にも分かっていた。敗残兵狩り。これほど神経を遣う戦闘はない。いついかなる状況で小競り合いが起こるかも分からぬ。ゲリラ戦のような様相すら呈するようになる。将の心算は鈍り、卒たちの士気は落ちる。現場から聞こえてくるのは、少しずつ、けれど確実にヒビの入つていく諸隊の様だった。そのような隊に、これ以上の命令を下すのは酷と言えた。

「ならば、江戸にいる控えの隊を分離して派遣するは如何でござわすか」

「いや、いけません」

江戸には彰義隊がいる。千単位の隊。一個の家中並の兵力を有しているのだ。もちろん兵器においては雲泥の差はある。だが、数はそれだけで脅威となる。

それに、江戸は新政府軍の本営である。迂闊に兵を動かすわけにはいかない。護衛軍を空にしてしまい、結果として謀叛の遠因を作

つてしまつた織田信長の例を引くまでもない。派兵して手薄になつてしまつたところにどこかの家中が攻め込まれたりでもしたらひとたまりもない。

出来ることならば。

大村は歯噛みした。俺が行きたい。

要衝の戦ほど難しいものはない。必ずや激戦が予想される。凡将を派遣するわけにはいかない。いや、大村からすれば、どの将とて凡将でしかない。自分以上に信頼に足る将はない。それに、関東中にいる敗残兵たちの処理に追われているこの状況では追加派兵も難しい。戦力の逐次投入の愚は避けたい。だからこそ、自分の目で白河を見、自分の軍略で白河を奪い返し、自分の手で奥州軍を駆逐したかった。

だが、それは状況が許さない。

あくまで大村は新政府軍の総司令官なのだ。おいそれと最前線に立つてはならない。それは大村の本分から外れる。大村の役目は各戦線の兵站の確保にあり、そしてその兵站確保の為の江戸防衛にある。そして、戦を大局的、総合的に判断する任務がある。

ならば。

西郷は言った。

「あの男に動いてもらひしきなか
「あの男？」

頷いた西郷は、地図の上的一点を指した。

「あの男は今、宇都宮を落としたところと聞きもす。白河からも近か。とりあえず、あの男を向かわせるが良かど」

宇都宮を攻めている男？

にわかには思い出せなかつた大村は、机の上に山積みになつてゐる紙束を拾い上げた。現場から寄越される報告だ。一枚一枚めぐり、宇都宮方面の報告を探す。

「あの男は」西郷は言った。「俺が一番戦で頼みにしている男でござる。いや、薩摩の戦において、これまで何度も薩摩を勝ちに導いてしまつたところにどこかの家中が攻め込まれたりでもしたらひとたまりもない。

てきた男でござる

薩摩の巨魁・西郷をして、「一番頼みにしている」「薩摩を勝ちに導いてきた」と言わしめる男。

不意に大村の手が止まつた。宇都宮の報告にまで行き着いたのだった。

そして、その報告に書かれていた参謀の名前を、大村は読み上げた。

「伊地知竜右衛門」

ああ。

大村は思い出した。鳥羽伏見の時に出会つた、独眼で短身瘦躯、杖をついて歩く男。目の前で見せられたあの素晴らしい用兵。あの軍はまるで伊地知の手足のようだつた。そして、死を恐れぬが如き呐喊兵と正確無比な鉄砲隊。長州の奇兵隊とはまた違う強さを持つ軍の主。

「しかし。伊地知軍も宇都宮を陥落したばかり。疲弊しているのでは?」

「心配ありもはん」西郷は言い放つた。「薩摩兵は疲れを知りもはん。それに、宇都宮の城を落としたばかり。恐らく士氣も上がつておいもそう

薩摩の大将・西郷吉之助が問題ないと言つたのだから、問題あるまい。

ならば。

大村と西郷の肚は決まつた。

伊地知竜右衛門の率いる一軍を、白河に派兵する。
最善の手だろう。大村は何度も自分に言い聞かせた。

そうして自分を納得させながら、大村は自分の目の前にいる敵の事を考えた。

上野寛永寺に潜んでいる、幕府の残党ども。

そして、英雄面をして今この場に立つてはいる、俗悪なる巨魁を。

「おや、如何し申した大村どん。怖か顔をして」

「いえ。彰義隊をどう始末しようか考えていたところです」
大村は今居る江戸城から、上野の山を望んだ。そして、さうに向ひに控えている白河の地を睨んだ。

宇都宮に本営を構える伊地知軍に、江戸からの命令が届いたのは慶応四年、四月の二十四日のことであった。

その日は雨であった。この時期には珍しい、しどしどと長く降る雨。その雨に身を濡らしながら宇都宮城に入る伝令は、司令官への取次を望んだ。「江戸からの命令!」 そう伝令は叫んだ。

伊地知軍副官の一人・川村与十郎は、その江戸からの命令に接した瞬間、我が身の血が全て逆流したような錯覚に襲われた。それだけ、その命令に含まれている情勢が深刻だということだった。

その命令書に曰く。

“仙台家中が我々に反旗を翻し”

“会津家中、仙台家中と協調を取りたる由。他奥州家中も会津、仙台に同調せし可能性”

“会津・白河を落とし候”

これは。

元々長崎にあつた幕府の海兵養成機関・長崎海軍伝習所にて諸学を学んだ経験がある上に薩摩という戦慣れした家中にその身を置いていた川村からすれば、その命令書に書かれていた内容が痛いほど分かつた。

これは、とてつもないことにござります。

伝令兵から命令書を受け取つた川村は、鬼の形相で宇都宮城の二の丸御殿内を駆けた。通りすがる士卒たちの会釈に応えもせず、眉を吊り上げてドスドスと歩く川村与十郎に声を掛けることが出来る者などいなかつた。

ドスドスと歩きながら、川村は己の上意を探す。
と。

キエヒヒヒヒ!

猿のような絶叫が庭の方から響き、川村の耳に至る。

この声に聞き覚えがあつた。これは薩摩に伝わる剛剣・野太刀自顕流に独特の掛け声だ。ひときわ大きな甲高い声を上げて太刀を振り下ろして敵を打つを極意とする、あまりに粗野である当流は島津家当主にさえ疎まれていたこともあつた。だが、その野太刀自顕流に育てられた川村からすれば、その声は子守唄のようなものだ。誰か、自顕流の鍛錬をしちょつか。こん雨の中に。

感心なことと思いながらも、川村は歩みを止めない。

やがて川村の足は表の庭が見える廊下にまで達していた。南向きの廊下からはどんよりと雲の広がる良く見えた。手入れの行き届き白砂が敷き詰められた庭が、少しくすんだ空の色を写して目の前に広がっていた。

だが、その庭に、明らかにその雰囲気から浮いている異物が置かれていた。

巻き藁。しかも、一般に使うものよりも太めに作られている。普通巻き藁は人の腕くらいの太さで作るのを基本とする。だが、そこに置かれていた巻き藁は人の胴くらいの太さはある。しかも、その巻き藁は一つや二つではない。既に斬り伏せられているものも含めれば、十はある。立っている巻き藁は二つ。それ以外は真つ二つにされて地面に転がっていた。

そして、転がる巻き藁たちに埋もれるようにして、男が一人立つていた。

短身瘦躯だとばかり思っていたが、それは川村の勘違いだった。背は低い。だが、上着をはだけて立ち尽くすその男には肩から上腕にかけて隆々とした筋骨が認められた。無駄のない筋骨。そして、隙のない立ち姿。

思わず川村は足を止めた。声を掛けようかとも考えたが、そんなことはとてもできなかつた。あまりに男の放つ気が恐ろしそぎて、声を掛けることさえ叶わない。

自然体で立ち尽くしていながら、巻き藁の前に立つ男は実に鋭い

殺氣を放っていた。

そして、ある刹那、男は動いた。

キエエエエエエエエ！

猿叫。そしてそれと共に腰の刀から刀が伸びた。一步も踏み出すことなく腰にあつた刀を引き抜いた男は、そのまま巻き藁に向かって繰り出した。下から上へと伸びる剣閃。その技の形を知らなければ、川村もその剣閃を目に捉える事が出来なかつただろう。

あれは“抜き”ではなかか？

川村は心中で叫ぶ。

“抜き”とは野太刀自顯流に伝わる抜刀術である。刃を上にして差している刀を左手の手の内で逆転させ、鞘から抜き放つや下から上へと振り払う技である。本来ならば右足を強く踏み出したうえで、背中の筋肉から足の筋肉までを一体にして抜き放つ。野太刀自顯流において、熟練者のみが学ぶことのできる技である。

だが、今、川村の目の前にいる男の“抜き”には右の踏み出しがない。足を一切踏み出さず、背中の筋肉のみを刃に乗せているようであつた。野太刀自顯流を知っているものからすれば、とんだ修行不足の剣である。

だが。

男の目の前にあつた巻き藁にピッと髪の毛のような筋が入つた。その一瞬後に、その筋を境にして巻き藁の上半分がズズズズと滑つた。ぼろつと巻き藁の上半分が地面に落ちた。そして巻き藁が音を立てて地面に落ちた頃には、男の刀は既に鞘に収められていた。そして、もう一つの巻き藁も、雨に濡れた地面にどさりと落ちた。

何度見ても、恐ろしか腕じや。

川村の言葉にならない言葉が心中にこだまする。

そうやつて何も言えずその場に立ちつくす川村を嘲笑うよつて、巻き藁を切り伏せた男はのつそりと振り返つた。

「おお、与十郎。俺の太刀筋を見ちよつたんか」

左目に眼帯をはめるその男。西洋風の軍服を支給されていりとい

うのに、この男は実際の戦場以外では和服を身につける。この時もそうだった。はだけさせていた袖に腕を通しながら、その男、伊地知竜右衛門は言葉を重ねた。

「どうも戦の指揮ばかりじゃと、腕がなまりもす。薩摩隼人たるもの、将帥と雖も一兵卒ではなか？」

「実に、その通りにござります。と、伊地知どん」

「ん、何やあつたんか？ 言つてみせ」

「大変なことになりもしたんでござります、伊地知どん！ 実は」

川村与十郎は江戸からの伝令を読み上げた。奥州鎮撫総督府の事実上の長・世良修蔵が仙台によつて処刑されたこと。これを以つて、奥州鎮撫総督府は事実上その命令系統が破綻してしまつたこと。仙台が新政府に対して対立姿勢を露わにしたこと。会津が白河城を占領したこと。これらの情報から、奥州全体が新政府の敵に回つてしまつたこと……。

面倒な状況には違ひなかつた。もともと関東の鎮撫だけでも苦戦しているところだというのに、ここにきて奥州まで反旗を翻したとなれば、北関東・宇都宮にとりあえず本營を敷いている伊地知軍は敵の目と鼻の先に陣を置いていることになる。しかも、江戸の大本營はさらに伊地知軍にさらなる命令を下してきた。

「しかも、俺どんに白河城の奪回を命じて来ておいもす。江戸の大本營は何を考えとうでしょうか？」

その川村の言葉には明らかに怒氣がこもつていた。当然だ。ようやく数日前、宇都宮城を奪回したばかりなのだ。その軍に対し、さらなる転戦を命じるなど。

だが、伊地知は朗らかにその川村の怒りを笑い飛ばした。

「面白かちゅう事じやなかか？」

お、面白か事？ 思わず川村は耳を疑つた。今の状況はとても面白いなどと形容できる状況ではない。難しい戦がさらに難しくなつたようにしか思えない。

だが、伊地知は笑みを浮かべたままで聞く。

「そん命令は誰のもんだ？」

「西郷さん、大村益次郎二人の名前になつておいます」

「ほつ、西郷さん、大村どんの……」

「大村益次郎ちゅうと、この前の大坂城ん時、しくじつちゅうった奴じゃあ……？ あんの戦下手に何が分かるちゅうんです！」

川村与十郎はかつて大村と邂逅している。大坂城接收の途上に大村率いる長州軍が敗残兵と小競り合いを起こしていた時、川村は伊地知軍の副将として大村軍の助太刀に入っている。あの無様な戦振りを見ている川村としては、大村が西郷吉之助と並び総司令官などという大役についていることからして到底納得できなかつた。

だが、伊地知は言つた。

「そやア、違うな」

「へ？」

“大村どんが戦下手”というところだ。あの時大村どんは確かに無様な戦をしちよつた。じゃつどん、戦ちゅうのは何が起るか分からん。もしあれが俺だとしても、同じこつになつちよつた

「そいどん、伊地知どんは違うもす！ 伊地知どんは薩摩が誇る名軍師でごわす！ あんなことにはなりもはん」

川村の熱っぽい言葉に、伊地知は呆れ半分に頬を搔いた。

薩摩の中では、伊地知竜右衛門はかなり特殊な立場を有していた。

元々伊地知竜右衛門は神童として知られていた。曰く、三歳のころに漢文を読み上げることが出来たといつ。後々の成長が大いに期待されていたが、子供の頃に罹った流行病によつて左目失明、右足の不隨という後遺症を負つてしまつた。だが、その逆境が伊地知の智の刃をさらに鋭いものにした。薩摩に伝わる兵法、合伝流の門をたたき、師匠より奥義を伝授されるまでに学んだ。そして、この男は剣の修行も怠ることはなかつた。動かぬ足を引きずりながらも立ち木に刀を振り続けるうち、薩摩の剛剣・野太刀自顕流さえも自分のものとした。だが、伊地知が輝いたのは己の智を用いた場であつた。

生まれた時代が良かつたとも言える。平時には何の役にもたない兵法の奥義を極めた伊地知。まさに乱世向きの男であった。幕末という乱世の中で、薩摩は何度も戦場に登場した。そしてそれらの戦の殆どに、参謀として伊地知は参加していた。合伝流お家芸の鉄砲隊を中心とした戦立ては、外国から輸入された新式銃と相性が良かった。

そんな伊地知に用意されていたのは、薩摩の巨魁・西郷吉之助の軍事的な右腕という役割と、薩摩の将帥たちへの教育だった。伊地知の手ほどきによって兵法を学んだ者は多かった。川村与十郎とてその一人である。後の事になるが、後に勃発する日清戦争・日露戦争で活躍する薩摩系の司令官たちのほとんどは、伊地知の兵法によつて育つている。

まあ、良か。

そう呟いた伊地知は言った。

「なるほどなあ、道理で大田原で旧幕府軍が悪戯をしじあと思つていた」

大田原とは宇都宮の北に位置する都市で、奥州に隣接する地域である。奥州街道沿いにあり、丁度奥州と接している。つまり、奥州が敵に回った現在、敵との“国境線”に当たる地域である。

数日前より、旧幕府軍が大田原にて示威活動を重ねていた。とりあえず一軍を派兵して鎮圧に当たらせていたところであつた。伝え聞くところだと、いやがらせのように挑発してきては小競り合いを起こしているらしい。もつとも、この段階ではほとんどその軍は追い払つていたが。

「新政府軍に対する撃討のつもりでもんぞ」

履物を脱いで廊下にあがつた伊地知はふう、とため息をついた。

「それに、実は世良殿から救援要請がきちよつた。まあ、断つてしまたが」

そう、数日前に世良から奥州への救援要請があつた。だが、当時伊地知軍は宇都宮城を奪つた直後であり動くに動けなかつた。つま

り、伊地知軍は事実上世良を見殺しにしてしまつたところにない。

雨雲の垂れこめる空を見上げた伊地知はぼつりと呟いた。

「また、あの着駢れん洋装に身を包まなくてはならん
洋装に？ それはつまり 。

川村の予想は的中した。

「兵を進めもんぞ、与十郎」

味方。そして軍学の先生。それどころかこの軍の最高責任者。その伊地知竜右衛門が、なぜか川村の心胆を寒からしめている。辺りの空気がビリビリと揺れる。まるで伊地知の言葉は竜のいななきのようだつた。

その日のうちに、伊地知竜右衛門は動いた。

一大拠点・宇都宮を失うわけにはいかない。全軍を出撃させるわけにはいかなかつた。そこで軍を分割することにした。薩摩のほかに他家中からの兵による混成。主将伊地知竜右衛門、副将川村与十郎。宇都宮に主戦力を残し、わずか二五〇の兵が奥州街道を上り、北に控える白河を目指した。

雨の中の進軍であつた。

雨の進軍はどうしても士氣に障る。

しどしどと降り続く雨は元々軍から士氣を奪う。その上、突然決まった進軍である。その上様々なか中の者が混じつた混成兵团である。そもそも、意思の疎通さえ怪しい。見るに見かねた川村が「トントコやれ節」の音頭を取つても、まばらな歌声しか返つてこない。だが、その中でも伊地知はなぜか楽しげだつた。

ずっと続く雨。その真ん中に奥州街道がまっすぐ伸びている。少し西日本よりも田植えが遅いようで、植えられている稻は未だ背丈が低い。が、雨が田に張られている水に無数の波紋を作つていた。その様を見つめながら、伊地知はゲコゲコと蛙の鳴き真似をしていた。そのじじまに、「いやあ、綺麗な水田でこわすなあ」と緊張

感の欠片もないことを言い放っている。

川村は横の伊地知に困惑顔を向けた。

「い、伊地知どん、こんなんで戦が出来もそつか？」

「」の言葉には、緊張感の感じられない伊地知に向けた皮肉もあつた。

だが、伊地知はその問いに答えなかつた。「うむづ、やはい洋服は性に合わんな」などと、薩摩揃いの軍服の袖をつかみながらぶつぶつと言つてゐる。ちなみに伊地知は長い距離を歩けない。そのため馬にまたがつてゐる。あまり歩けないのにどうして馬に乗れるのか、川村にはその理由が分からぬ。

伊地知どん！ もう一度声を掛けてようやく伊地知は川村に向いた。

「ああ、聞いえとうよ。お前はんの問いに応えてやりもんぞ。……まあ、無理だろうな」

「な、戦う前から何をおっしゃりもんそか！」

「」じゃあなぜ江戸からの命令に対してその日のうちに行動したのか分からぬ。こんな強行軍を組んで進軍することなどないではないか。

「不思議そうな顔をしじあなあ、与十郎」

「当り前に」わす！

この出撃の命令を聞いた瞬間、川村の胸に掠めたのは、“奇襲攻撃”という策だつた。白河城が陥落したのが四月の二十日。つまり、まだ四日しか経つてゐない。もちろん既に会津兵が白河城に入城しているだろうが、効果的な防衛陣は構築できていなかつた。

それに、白河城は南からの攻撃に弱い作りになつてゐると聞く。元々白河城は、南下してくると想定された東北諸家中を睨んで構築された城である。それがために、味方を引き入れやすいように南から入城しやすいようになつてゐると聞く。逆に、北側に幾重にも防御線を敷いてゐる。そして、今回の伊地知軍は南から白河城を攻める形となる。

さらに言えば、白河城は平山城だ。山の上に築かれた山城とは違
い、主要部分しか丘の上に築かれていない平山城は鉄砲や大砲にす
こぶる弱い。これまで太平の世であったがために露呈していなか
つたが、日本にあつた城のほとんどはこの時代には殆ど無力化して
いたと言つても過言ではない。いくら門を堅牢に閉ざし、火縄銃を
狭間から突き出したところで、その頭上を飛び越えて銃撃の嵐や砲
弾の雨あられを降らせることが出来るのだ。

それらの状況が示すのは 。

白河に敵方の人員が補充される前に奇襲攻撃を仕掛ける。数では
劣るだろうが、最新鋭の銃砲、そして精強なる新政府軍で叩けば撃
破出来ない相手ではない。むしろ、攻撃を延期すれば、交通の要衝
白河の重要性ゆえに奥州の兵たちが集まってしまう。

それに、そもそも一度こちらが獲つた城を奪われてむざむざ首を
くわえて待つてゐるなど、薩摩隼人の端くれである川村には承服し
かねることだった。

「与十郎、ちつと考えてみい。たかだか一五〇で戦は出来ん」

「じゃつどん伊地知どん。そげなこつでは……」

「与十郎」

伊地知は涼しげな顔を川村に向けた。武骨な鎧で左目を隠す独眼
竜は、その片目に川村の事を捉えていた。決して睨みつけているわ
けではない。だが、いつも伊地知にこうして見つめられてしまうと
何も言葉を返すことが出来なくなる。蛇に睨まれた蛙の如く。

「こん戦、一筋縄ではいかん」

「い、いけんいう意味でごわすか」

だが、伊地知は多くを語らなかつた。代わりに、青々とした苗が
続く田んぼを指しながら一言こつ言つのみだつた。

「田んぼは怖かところだ」

「怖かとこ？」

首をかしげる川村。延々と続く田園風景の何が怖いというのか。

「それに」

「それに？」

伊地知は思い出し笑いのように、肩を少し震わせながら口を開いた。

「この戦、面白か戦ぞ」

その言葉の意味を聞こうとした川村だが、問いを重ねようと

した前に伊地知を呼ぶ声が一人の間に割り込んだ。

川村と伊地知の前に現れたのは斥候兵であった。

その斥候兵は軽く頭を下げて伊地知に報告した。

「白河の民たちの協力が得られませぬ！ 皆先導を断つて参るありさまで！」

「そいか。下がつて良か」

斥候兵は頭を下げて二人の前から姿を消し、一五〇人の中に紛れていった。

こういった遠征軍の場合、何とかして地元民の協力を得るのが基本である。どの地域にも機を見るに敏な者はいるし、あるいは現行の政治に文句がある者もいる。そういうた、敵方からすれば“不穏分子”でしかない連中を上手く用い、先導役とするのである。

伊地知はため息をついた。

「まあ、強行軍では先導役の確保が難しかつたが

……

「まったく、なんと無明な連中！」川村は語尾を荒げた。「朝廷の御威光に従わぬとは何たるこつ！」

不意に伊地知は鼻を鳴らした。

「そげなもん、腹の足しにもならんからなあ」

「じゃつどん、伊地知どん！ おいたちは天下最強の薩摩軍にござります。如何に敵が多かるうが、おいたちの武は負けもはん！」

「その“天下最強の薩摩軍”なるもんも、この辺りの民にとつては腹の足しにもならん」

ぴしゃりと言つてのけた伊地知を前にして、川村が文句を口にするわけにはいかなかつた。仕方なく、心のうちでやり切れない思いを咀嚼する羽目になつた。

と。

「川村殿、伊地知殿！」

一人の前に兵が一人歩み出た。隊列を少し乱しながら前に出たその兵は、どうやら薩摩者ではないらしい。言葉の端々に薩摩のものではない訛りが混じる。

腹立ち紛れに川村は怒鳴る。

「持ち場を離れうのじやなか！」

「お待ちください！ 今、先鋒がこんな立て看板を見つけました」

「立て看板？ ほほう」

伊地知は身を乗り出した。川村にではなく伊地知に向かつて頷いたその兵は、背中に隠していたものを伊地知に向かつて掲げた。

真新しい板に墨で大書されている立て看板。雨に濡れてはいたが、黒々とした文字ははつきりと読むことが出来た。その立て看板には、「此れより会津に候」

そう、書かれていた。

ここは未だ関東の大田原である。会津の勢力下どころか、白河の勢力下ですらない。そんなところにある会津の所有権を主張する立て看板。つまりこれは、白河城陥落後 つまりは奥州が新政府に反旗を翻した後に取り付けられたものだ。

「おのれ会津！ 薩摩を愚弄すうとは、許さあぞ！」

「落ち着け与十郎」

「これが落ち着かずにいられもすか！」川村は伊地知に食つてかかる。「あの逆賊ばら、空城一つ落としたくらいで調子に乘いやがつて！」

「与十郎」

伊地知は馬の上から同じく馬に乗る川村の肩を叩こうとしたものの、川村は身をよじつてその手を振り払つた。眼を血走らせながら伊地知に向いた川村は、がちがちと歯を噛み合わせながら息を吐いた。

「俺はもう我慢なりもはん！ 白河を今すぐ落としもす！ 鉛の雨

を雨あられと降らせてやりもんそ！」

もともと、白河城を奪われたことからして面白いことではない。

しかも会津のみならず奥州の各家中までもが会津に肩入れして新政府と対峙することとてたまつたものではない。その上白河の民たちは朝廷の威光に従わない、さらには傍若無人なこの立て看板は何だ。

。元々短気な川村の堪忍袋の緒は、既にズタズタに切れていた。赤鬼のような形相の川村。立て看板を持ってきた兵もその川村の怒気に触れるや、恐れをなして下がつていつてしまつた。

「頭を冷やせ、与十郎」

「なして伊地知どんはそげに心静かでいられるのじわすか！？」

もう俺は我慢出来ん！ 伊地知どん、俺に一軍を『えてくいやんせ！ 百で良かどから！』

川村には自信があった。薩摩兵の百は他国兵の千にも一千にも匹敵する。日の本一の機動力、日の本一の火力、日の本一の白兵、日の本一の胆力を持つた薩摩軍が火の玉となれば、万の軍とて恐るるに足らず。事実、川村が見てきた戦のどれもがそうであつた。エグレスと戦つた時にはさすがに兵器の性能に雲泥の差があり負けてしまつたが、エグレスの軍学を学んだのちに薩摩の負けはなかつた。数に勝る徳川軍を新式銃で駆逐した。軍船で逃げ帰つたかつての征夷大將軍を追い、あと一歩のところまで追い詰めた。甲州では旧幕府軍の残党たちを者の数ともせずに撃破した。そして江戸の陥落後には関東を転戦して逃げる敵を追つてきた。

その薩摩兵たちが、負けるはずはなか。

川村にはそんな意識がある。

荒れ狂う奔流のような激情を隠さぬままで、川村は伊地知を睨みつける。視線で射殺そうとしているかのようであつた。ともすれば、伊地知の事を斬り殺さんと息まいているようにさえ見える。

だが、伊地知はその視線をものともしなかつた。まるで子供の駄々に呆れるかのようにそっぽを向いていた。だが、何度も「伊地知どん！」と川村にせつつかれるうちに、ふうとため息をついた。

「……ああ、良か。ただし」

「ただし？」

「百五十。百ではなく、百五十を」

「百五十？」川村は思わず顔をほころばせた。自分の言った数字よりも、五十も上乗せした数を与えてくれた。しかも、この伊地知軍において百五十とは全体の六割にも当たる。つまりは主軍を与えられたということだ。これらの事実が示すもの、それはつまり、伊地知が川村の戦略を追認したということに他ならない。

「あいがどごわす！」

頭を下げるや川村は馬をあおった。甲高くいなった馬は川村の手綱さばきの通りに兵たちの脇に踊り出、兵たちを一人、また一人と抜いて行つた。

だが

「ちつと待て！」

伊地知に呼び止められた。

走り出さんとする馬の手綱を引いて、川村は伊地知に向いた。

「なんでごわすか伊地知どん」

「一つ、約束をしていけ」

「は、なんでもすか」

「たつた一つ、簡単なようでいて難しかこつだ！」伊地知は声を震わせた。「かならず生きて帰つてきもんせ！ 何があつても生きて帰つてきもんせ！ 分かつたな！」

出撃前になんという縁起でもないことを。

だが、それを口にしたのが伊地知竜右衛門だつたということが、川村の心中に暗い影を落とす。己の軍略の師が自分に何を伝えようとしているのか、川村にはさっぱり判り兼ねた。

じゃつどん、いくら考えても分からんものは分かりもはん。

自分の心に忍び込んでくる弱気。頭を振つてその弱気を振り払つて、川村は伊地知に言った。

「出撃しもす」

蹄の音を高々と鳴らしながら、川村与十郎は行軍の最前列にまで飛び出した。そして百五十を本隊から切り離し、その行軍速度を少しづつ速めていった。稻妻のような川村の命令に身を震わせた兵たちは、川村の言葉のままにぐんぐん行動速度を上げていく。

それはそれで川村の用兵である。あまり士気の上がらなかつた兵たちを怒号一つであれほど苛烈に動かす。川村には将たる器があるかもしねり。

じゃつどん。

伊地知はのんびりと口にした。

「将たるには、ちつと思慮が浅いかもしれん」

伊地知將軍！呼び声に、伊地知は向いた。そこには兵の一人、百人を束ねる士、小隊長が立っていた。

「我々は如何します？川村將軍と共に参りますか

伊地知はへらへらと手を振つた。

「その必要はありもはん。我々は別働しもす」

「ハツ！」

「ただし、川村軍につかず離れず行軍しもんぞ。行軍疲れせん程度にな」

ふう、とため息をついた伊地知は空を眺めた。いまだ霧のような雨が降り続いている。天下には未だあまねく日が降り注がない。仕方がないことだ。それに、この厚い雲を払い、日本中にあまねく日の光を注がせるのが政府軍の任務だつた。徳川幕藩体制という、厚く暗い雨雲を。

そういえば、伊地知は小隊長に声を掛けた。

「いつ頃、俺どんは白河城に到着しもんぞ？」

「そうですね」小隊長は空を眺めしばらく田を畠に泳がせてから、慎重に答えた。「明日、二十五日の早朝といったところでしょうか」「そか、あいがと。……下がつて良か」

小隊長を下がらせてから、伊地知は呟いた。

「正と出るか、奇と出るか。こればかりは分からん」

伊地知の独眼は、遠く白河に向いていた。

3

一方その頃、白河。

白河も雨の中に沈んでいた。その白河の中央に位置する白河城。晴れの日ならば白の漆喰が美しい白河城だが、雨の中にあってはくすんだ色を見せるばかりだった。

くすんでいるのは風景だけではない。人の心もくすみ始めている。「薩摩の兵たちが攻めてくる」

その情報に白河城下は揺れに揺れています。町人たちは戦火を恐れて家を棄て始めている。平時の白河城下は奥州の玄関口ということもあって旅人たちで賑わう。だが、旅人で賑わはずの白河城下には槍や銃を持った兵たちが慌ただしく行き来している。町人たちの持つ極彩色が姿を消し、代わりに武人の持つくすくすんだ色合いが白河を支配しようとしていた。

白河城を北に背負う丘の上では防壁の準備がなされていた。町人たちが棄てた家の置をひき剥がし、家に残された簾笥を一人がかりで運んで障壁を作っていく。

その丘の上に、会津預かり・山口一郎やまぐち じろうが立っていた。己の率いる仲間たちに防壁の設置に関してあれこれと命令を下しながら、遠く関東を睨みつける。山や丘の向こうに控える関東。既にほとんど政府軍の手に落ちてしまつていてと聞く。確實に政府軍はここを攻め

てくる。山口の野生の勘にも似た軍略眼はそう告げている。

この男、只者ではない。

元は江戸の御家人といつ。だが、諍いにより人を殺してしまったことから逃避行、たまたま草鞋を脱いだ京都で同じく武州の浪人・近藤勇らと知己となる。そして、そのまま近藤の世話になり、近藤たちが作り上げた京都治安維持部隊・新撰組に入隊する。

そして時は流れに流れ、怪我により戦列から退いている土方歳三に代わって新撰組の残党を取りまとめ、会津に身を寄せているのであつた。

いや、それだけではこの男の紹介には足らない。

この男、新撰組時代に斎藤一さいとう はじめと呼ばれていた男である。

新撰組という組織は極めて“身内”的意識が強い組織であった。近藤の股肱の仲間や同郷たちで要職を固められていたと言つてもよい。その中に在つて、京都で知り合つた言わば外様の山口二郎（斎藤一）は副長助勤などの要職を歴任する。その裏には、斎藤一という男の剣腕があつた。

この男は強かつた。「これがこの前何処そこで手に入れた刀剣云々」と、普段は刀漁りの趣味と刀剣談義を暇そうにしている新撰組隊士を捕まえてはとうとう仕掛ける男だつたが、いざ実戦となるとこの男は強かつた。恐らくは新撰組の隊士たちの中でさえ、この男とともにやりあえる者は少なかつただろう。

それに、何より任務に対しても忠実であるその姿勢が近藤たちに愛された。或る時など、間諜という難しい任務を与えられながら、敵に気取られることなくその大役を果たしている。

だが、その近藤ももういない。

下総流山で布陣中、囲まれた際に敵方に投降したきり、何の音沙汰もない。

恐らくは身分がばれたのだろう。山口はそう思つてゐる。

新撰組の近藤勇といえば、京では知らぬ者がない。薩摩・長州・土佐の者たちの中にも近藤の顔を知つてゐる者も数多くいよう。そ

れに、新撰組はあまりに恨みを買いすぎた。恐らく、"新撰組局長" という身分がばれたら生きては帰れまい。

思えば、既に色々な仲間と生き別れた。

京の新撰組屯所で笑い合つた連中のほとんどは、もういにない。ある者は死んだ。ある者は病氣にて戦列から離れた。またある者は袂を分かつて去つていつた。

まあ、いい。

それでも戦える。

山口は後ろに控える新撰組隊士たちを見やつた。関東で負けに負ってきたにもかかわらず、隊士たちの目には未だ狼のよくな獣じみた土氣が宿つている。部下たちの士氣に背中を押されるようにして、山口はまた関東に目を向けた。

山口が今着陣しているのは、白河城下から南に数里のところにある、白坂口である。やはり奥州街道沿い。白河は盆地の中にある。元々平野ではない。小さな丘や山が林立している。平山城の白河城に籠つているばかりでは戦にはならない。結局白河城を守ろうと思えば、点在する丘や山に兵を置き、それらの兵を有機的かつ効率的に用いる必要がある。城の周りにある小山たちすらも防衛陣に加えるのだ。その点において、同じく白河城に入った会津の青龍隊も同意のようだつた。会津の壯年武士によつて構成された青龍隊の中には戦に明るい者もいるようだつた。「白河防衛は、ただ白河城を守るのみにあらず」。山口の提案に対し、青龍隊は同意を示した。青龍隊のその言葉には、別の意味もあるらしい。

白河城は城の南に城下町がある。なので、ただ籠城してしまつと城下町がすぐ火の海となつてしまつ。南から侵攻してくる政府軍は、白河の疲弊を狙い城下町に火を放つだろ。そしてその火は容易く城にまで移つてしまつだろ。それは何としても防がなくてはならない。防衛線を広げ、城下町に敵兵が入らないようにしなくてはならない。

それに、数の利もあつた。

白河城接收の際、会津は大規模な戦闘を予想していた。奥州鎮撫総督府の世良が死んだとはい、将兵たちが白河城を死守してくると踏んでいた。だからこそ、以前から計画のあつた白河城奪取を、世良の死の間隙をついて行なつたのである。

だが、意外にも白河城接收に伴い大規模な戦闘は起らなかつた。そもそも、奥州鎮撫総督府なるものの兵力はさして多くなかつた。世良や大山などの下参謀についていた直属の兵は千にも満たなかつた。奥州鎮撫総督府によつて接收されていたといえは良かつたが、結局のところは総督府によつて命令された仙台などの家中が白河城を接收していたのだつた。

が、世良が死んで奥州鎮撫総督府が崩壊したことにより、白河城に入つていていた仙台兵たちが撤兵し、ほとんど空城となつていった。その城を、会津兵が接收した。これが「白河城陥落」の実情であつた。戦つて進軍したもの何も戦闘が起らなかつたという肩すかしはあつたが、おかげで兵力はかなり増えられている。会津兵、千。これならば、城に頼らずとも籠城が出来る。防衛線を広げることが出来る。

しかもこの雨。

山口は空を睨む。振り止む気配のない雨。

そして、山口ら新撰組の眼下に広がる田園風景もまた、こちらの地の利を告げている。まつすぐのびる奥州街道の両側に広がる田園。そしてその田園の海にぽつかりと浮かぶ丘や小山。

戦える。

山口は既にそう踏んでいる。

さらには、放つた斥候からもたらされた情報も、こちらの有利を示している。

敵軍の数、一一五〇。

はつきり言つて、"たつた"である。こちらの陣容千に比べ、はるかに少数。こちらの一部隊程度の兵力で、敵軍は千を相手に戦を張ろうとしているらしい。最初は斥候や先発隊かと疑つてもみたが、

斥候のもたらす見解はまったく違つた。確かに先発隊かもしれないが、向こうが後続を期待している気配は無い。まるで敵軍を追撃しているかのような勢いで、白河に向かつて進軍していく。

この状況が示すもの。

その先発隊は、後続を待つつもりがない。迅雷の如くに進撃、虚を突いて勢いで白河城を奪いに来る手はずを取つてい。

「はは

山口は思わず声を出して笑つた。

「それが奴らの戦か

なんと愚かな戦振り。なんと思慮のない戦振り。

確かに薩摩たちの武装とこちらの武装は比べるべくもない。会津兵の中には、戦国の頃に活躍していた火縄銃を抱えている者の姿さえある。片や向こうは元込め五発連射式の新式銃を装備していると聞く。しかも精度・威力ともに桁違いと來ている。

鳥羽伏見ではその兵装の差で泣きを見たが、この時ほど薩摩の最新鋭の兵装に感謝したことはなかつた。

油断しているな。

それが、山口一郎の下した結論だつた。

敵が斥候を放つてゐる様子もない。いや、放つてゐるのかもしないが、その斥候の情報を活かそななどといつ氣はないらしい。でなくば、大田原から白河まで、あんな苛烈な進軍はしない。事を構えるに当たり情報を集める氣ならば、時間稼ぎの意味もあつてもう少しゆっくりと進軍してくるだろ。敵の進軍は、こちらの喉笛を引きちぎらんとする意図が見え見えだ。

だが、そんな粗雑な戦が出来るのは大軍が小さな城を落とす時くらいのものだ。寡兵で出来る戦ではない。どうやら薩摩兵の連中は、ここに死にに来るつもりらしい。

「な、何が可笑しいのです？ 局長代理

後ろに控える新撰組隊士・中島が山口に声を掛ける。すると山口はぐるりと振り返り、新撰組隊士たち皆に向かつて言葉を投げ放つ

た。その大音声は普段、ぼそぼそと喋る山口にはない霸氣があつた。
それがゆえに、山口の言葉は辺りに響き渡つた。

「新撰組隊士！ よく聞け！ これから敵がここを死地とも知らずに飛び込んで来る！ 数は一五〇。新式銃を持っているだろ？ が、物の数にならん。将の首を取るぞ！」

オオ！

その言葉に新撰組隊士たちは唸り声を上げた。

あと、一刻もすれば夜が来る。

敵が白河まで、そしてこの白坂口にまで達するのは、恐らく明日二十五日の早朝だろう。

隊士・中島に防墨の構築が完了したら休んでいい、との命令を下した山口は、伝令を飛ばした。相手は味方の青龍隊。本隊は同じく白河城の南側の棚倉といつところに、別働隊はここに白坂口の、新撰組の背後にある丘の上に陣を張っている。

山口は既に戦図を描いていた。頭の中に広がる軍略。それが相手に通じるか。否、必ず相手をその策の内に閉じ込め、撃滅しなくてはならない。

そのためには青龍隊との連携が不可欠だった。

あとは、青龍隊がその山口の策に乗つてくるか。

しばらくして、伝令が戻ってきた。

その伝令は、青龍隊の意思を代弁した。

“山口殿の策、苦しからず”

つまり、事実上の追認だ。

よし、獲つてやろうじやないか。山口の心中が、焰のように一瞬揺らめいた。だが、そうやって溢れ出る闘争本能を無理矢理に抑え込んだ。

この思いを爆発させるのは、明日の朝だ。

京の頃から腰にあつた刀の柄を撫でながら、山口はひたすらに夜を待つた。

二十五日、夜明け前。

斥候から情報が入ってきた。

“薩摩軍、白河領内に入つた模様！ 数は一五〇！ どうやら後方で軍を一手に分けた模様！ しかれども一軍どちらも奥州街道を北上中！”

伝令を下させた山口は、心のうちに呟いた。

来たか。

一睡もできなかつた。どうも血が騒いで仕方がなかつた。どうやら同類は何人もいるようだつた。特に京の頃から新撰組にいた者はちは、それが顯著だつた。例えば巨体で鳴らし「力さん」と隊内で呼ばれている島田魁などは、その巨体を横たえながらもらんらんとその目を輝かせている。池田屋事件の折にも功を上げた古い隊士、山口からすればもう五年もの付き合いになる。

山口はのつそりと身を起こした。

「斎藤さ……、いや、山口局長代理。敵が来たのか」

大きな身を横たえていた島田もすつくりと身を起こした。既に新撰組の兵装もすっかりその形を変えていた。鳥羽伏見の敗北を経て、新撰組は和装を棄てた。

もはや刀や鉄砲では戦は出来ねえやな。

土方歳三はさる幕臣にそう語つたという。

それ以来、新撰組は西洋式、とりわけフランス式の兵装を取り入れよう努めた。そうして会津にいる頃には、重い鎧は廃され西洋式の軍服に、そして刀の代わりに銃が支給されていた。

かつては大鉢金に鉄小手鎧帷子に身を包んで大身槍と剛刀を引つ提げていた島田さえも、今は黒い詰襟の洋装に、西洋式の先込銃を手挟んでいる。腰にある剛刀だけが、往時の武者振りを示すばかりだった。

洋装に身を包む島田を見上げながら、山口は口を開く。

「おう。今日の朝には来るぞ」

「隊士たちを起こそうか」

「いや」山口は頭を振った。「寝かしといてやれ。寝不足で戦が出来ないなんて言われては叶わん」

「そうだな」

島田も同意した。力士と見間違うほどの巨体を揺らしながら笑う様は、なぜか周りに滑稽を与える。普段あまり笑うことのない山口にさえも、笑いをこみ上げさせる。

その笑いをかみ殺す意味もあつて、山口は口を開いた。

「そうだ、力さん。お前さんに聞いておきたいことがあつた

「ん、なんだ、局長代理」

「何で、お前はここにいる？　お前は永倉さんに推挙されて新撰組に入ったんだろ？？」

話に出た“永倉”というのは、かつて新撰組にいた“永倉新八”的ことだ。だが一ヶ月ほどに近藤勇と袂を分かち、今や行く手は分からぬ。聞いたところだと、新たに旧幕府軍の兵たちと合流し一隊を作つたらしい。島田魁は、その永倉新八の紹介で新撰組に入つた男だ。永倉について行つたとしても不思議ではなかつた。

山口からすれば不思議だつた。島田が未だに新撰組にいることが。だが、島田は目をまん丸にした。

「何言つてんだ、お前。まあ確かに俺は永倉の推挙で新撰組に入つたがよ、新撰組に入るのを決めたのは俺だ。で、どう身を振るのかを決めるのも俺だ」

「そうか」

「それに、島田は言つた。『俺には帰るところがねえ』話を促した。すると島田は続けた。

「俺は元々次男坊だ。帰る家もねえ。かと言つて、俺らの殿様、徳川幕府ももうねえ。大樹公のお膝元にも帰れねえ。となれば、もう俺の帰るところは新撰組にしかねえよ」

「帰るところ、か。」

山口は呟いた。

俺には帰るところがあるんだろうか。

山口にだつて同じことが言える。草奔の身、今更家には帰れない。幕府が崩壊した今、新撰組の働きによつて下賜された祿さえもどうなるか分からぬ。山口も島田と同じだつた。

俺もまた、新撰組にしか帰れないのか。

まあ、いい。

「なんとしても勝とうか、力さん」

「言われるまでもねえ」

島田は拳骨を山口に差し出した。山口はその拳骨に自分の拳骨を含ませた。「じつん、と鈍い音が一瞬走つた。

と。

「伝令！ 伝令！」

伝令兵が新撰組の陣に飛び込んできた。あまりの大音声に眠つていた隊士たちも目をこすりながら顔を上げた。その伝令兵は一瀬を見つけるやその前に踊り出て、身をかがめた。そして挨拶もそこそこに持たされた情報を山口に報告した。

「敵兵！ 白坂口に進軍中！ 早朝にこちからへ到着する模様！」

その言葉を聞くや、隊士たちは咆哮を上げた。

ウオオオオオ！

その唸りは辺りに「だまし、白河の明けきらぬ空に広がる。が、その唸りの中、山口が怒鳴り声を上げた。

「静まれ！」

その一喝に隊士たちは上げていた声を抑え、首をひねり出していた。隊士・中島などは不満げな顔さえ晒していた。

ふう。ため息をついた山口は辺りを見渡す。隊士たちは一瀬を見つめている。その様を確認してから、山口はゆっくりと口を開いた。「我々は伏兵となる。お前たちの貯め込んでいる鬱屈、全て隠せ！ 伏兵。つまりは軍の気配を消した上で騙し撃ちをする兵とこいつ」とだ。

誰もが困惑する中、隊士の中島が前に踊り出た。

「局長代理。つまり我々に卑怯な戦いをしろと？」

卑怯。敵の後ろを取つて戦うのは武士にあるまじ。

「中島、良く聞け」と、山口。「この戦いは負けてはならない戦いだ。無論、これまでの戦も負けてはならない戦いだった。だが、この戦いに負けてしまつたら次は無いだろ。俺たちに帰るとこりがなくなつてしまつ。この戦、なんとしても勝たなくてはならない」「それは分かっています！ だが、そんな卑怯な手を使わずとも

「使わなくては勝てない！」

山口はそう断じた。鳥羽伏見、甲州戦争という新兵器による戦争を新撰組の、つまりは一軍の幹部として、見てきた山口からすれば、それだけ薩摩軍の装備は驚異だった。

さすがの中島も、黙りこくつてしまつた。

それを見届けるや、山口は隊士たちを見渡した。どの顔も、一緒に死線を越えてきた仲間のそれだ。そして、山口の帰るところ、新撰組を為している者たちの顔だ。

「いいか。敵が來ても迂闊に撃つな！ こっちの装備は火绳銃だ。先に氣取られればこちらがハチの巣になる。しつかりと引き付けた上で行動する！ いいな、俺が良いといつまで撃つんじやないぞ！」

「ハイ！」

隊士たちは唱和した。そして持ち場に散らばつていった。ふん。

ため息をついて敵のやつてくる南を向く山口。だが、すぐに横の島田魁に肩をつつかれた。

「おい、局長代理、あれ」

「ん？」

島田の指差したのは、後ろに立ち尽くす中島の姿だった。一人持ち場に散らばるその場で俯く中島。ぐつと歯噛みしながら下を向いている。眼を細めてその様を見つめる山口は、中島に声を掛けた。

「中島、君は何処の持ち場だ」

「自分は抜刀部隊の小隊長です」

抜刀部隊。つまりは白兵戦を行なう部隊の事だ。銃砲部隊の支援を受け、呐喊して敵を殲滅する役目となっている。とは言つても、その実態は全二十人ほどの小さな部隊だ。中島はその剣腕を買われ（というよりは京時代からの古参隊士といつこともある）抜刀隊の小隊長を拝命している。

山口は頷いた。

「ならば中島。俺が一時的に抜刀隊小隊長をやつし

「は？」

「お前は今回、俺の席に座つて戦全体を見渡せ。俺は一兵卒に落ち

る」

「な、何をいってやがる！」その言葉に反応したのは島田魁だった。

「お前は土方さんから指揮を委ねられている身だろうが！ そのお前が何で……」

「ならば力さん。あんたに一時指揮を委ねる」

「何だと！？」

スタスターと歩を進める山口は未だ下を向いたままの中島の肩を叩いた。そして中島の脇をすり抜けた山口は、腰の刀の柄頭を撫でながら抜刀隊の持ち場に消えていった。

「まつたく」顔を思い切り歪めて、島田は頭を搔いた。「昔からそうだが、どうもアイツはつかめねえところがあるよなあ」

だが、いくら考へても仕方がない。土方歳三に指揮を委ねられた山口一郎に指揮を委ねられてしまつたからには、島田魁がこの場で指揮を取らなくてはならないことに代わりはない。とはいっても、既に山口から戦の手筈は聞いている。あとはその大枠を守つた上で状況に合わせ臨機応変なる戦を描くしかない。

山口の後姿を見送りながら、島田は力なく笑う。

で。

島田はボケつと立つてゐる中島の背中を思い切り叩いた。

「おい中島！ しつかり見ておけ！ 局長代理殿がお前に勉強しきつて言つてるんだ！ 局長代理代理の俺と一緒に戦の見物と行くか」不承不承ながら、中島は頷いた。

「はい」

「よつしゃ」

島田はまた中島の背中を力任せに叩いた。そして、大音声で隊士たちに篝火などの伏兵に邪魔な物を処分するように言いやつた。その声が広がるうちに、新撰組が潜む丘は夜の闇の中に沈んでいった。銃砲隊に火繩の点火を命じておく。もちろん、火繩を外から見えないように隠匿した状態で、だ。

島田は空を眺めた。

運が良い。

昨日夜まで降つていた雨は、いつの間にか上がつてゐた。火繩がしきることはない。その上昨日からの雨で道の状態はあまり芳しくない。最初山口の策を聞いた時、正直島田は「そんなに上手く行くもんかい」と反発を覚えた。だが、今は違う。

もしかしたら、奴の策通りに事が運ぶんじゃないか。そんな

予感が胸を掠めた。

「よし、全軍息を沈めろ！ だが氣まで沈めるんじゃねえぞ！」

島田の檄に隊士たちは無言で頷いた。

事が動いたのは、空が白み始めた頃のことだつた。

「敵軍、南前方一里ほどのところを進軍中！」

斥候の報告が島田の耳に入る。

「ああ、本当ですね」

中島が遠眼鏡を使って南を凝視している。その遠眼鏡を島田はひつたくつた。

確かに敵軍が進軍してきている。

数は約百五十。斥候の報告通り。どうやら歩兵が主らしい。砲は二つ。主力は鳥羽伏見でも見た揃いの制服、薩摩。だが、その中に薩摩の戦装束とは異なる格好をした者たちの姿もある。そして、部隊の中で唯一馬に乗っているのがこの軍の首魁だろう。

この状況が示すことは。

敵軍には機動力があまりない。そして、薩摩が主力ながら、他の家中も加わる混成軍だということ。そして、火力もそこまで強くはないということ。

敵軍が近づいてくるにつれ、新撰組の中にも熱気が広がる。殺気と言い換えてもいい。いつ火縄銃の引き金を引いてもおかしくない顔を浮かべている。だが、島田はそれを必死で抑えた。

「まだ、まだ引き付けるんだ」

敵軍百五十は奥州街道を竜の如く上つてくる。もしも前日が晴れていたなら砂塵が辺りに舞い広がつていたところだつただろう。未だ十町も距離がある。島田は心の内で敵軍との距離を数える。

九・八・七・六・五・四・三……。

一数えるごとに、島田の心臓が高鳴る。こちらの火縄銃の有効射程はせいぜい一町。向こうはその四～五倍の有効射程を有している。如何に数で勝るといえど、弾が届かないのでは戦にもならない。逆

に言えば、こちらの射程に敵軍が入ってくれさえすれば、それでいい。

と。

迅雷のような音が辺りに響いた。まるで地面が割れたような音。な、何だ！？

見ると、それは新撰組の後方の丘に陣を構えている青龍隊の砲撃の音だった。確か旧式の砲が一つあると聞いているが、その一台を交互に撃ち放つているらしい。

だが、その砲は敵軍に当たらない。距離は充分のようだが、的が絞り切れていないらしい。

ち、先走り過ぎたか。

青龍隊の砲撃は明らかに早すぎる。新撰組の伏兵を生かしたいなら、もっと敵が奥深く入つてから砲撃すべきだつた。

事実、敵軍は即座に戦闘態勢に入つた。新撰組の前方三町の辺りを進軍していた敵軍は即座に横展開し、青龍隊のいる丘に向いて銃撃を始めた。火縄銃の音とはまるで違う、乾いた音が散発的に響く。そうして青龍隊と敵軍との間に戦端が開かれた。

だが、島田は、新撰組は、動けずにいた。

何より青龍隊の発砲が早すぎる。火縄銃の有効射程はわずかに一町。三町の距離に展開している敵軍に用いるにはわずかに遠い。確かに撃つてやれないこともないが、それでは有効な打撃とならない。

「島田さん！ 動かないんですか！」

中島が焦り出している。いや、中島だけではない。他の新撰組隊士たちも島田の事を血走つた目で見つめている。痛いほど気持はわかる。だが、ここで撃つても無駄弾になるのは火を見るよりも明らかだ。

「おめえら、我慢しろ！ 機になつたら撃ち方を命令するから、それまで黙つとけ！」

何より、島田が我慢できない。仲間が戦っているといふのに、こゝうして傍観しているなど。

しばらく戦闘が続いただろ？が。その中で、ようやく敵軍は砲を運用し始めた。新式の砲だろ？聞いたことのない風切り音が響く。そして、その砲撃が島田の鼓膜を揺らし、最後には青龍隊の丘に突き刺さる。ビリビリと辺りの木端が音を立てる。

敵軍は一台ある砲を交互に打ち鳴らし、青龍隊の陣を攻め立てる。さらには新式銃の雨あられ。鳥羽伏見で見た、薩摩軍お得意の戦運びだ。火力を前面に出し、少しずつでも敵の疲弊を狙う。薩摩軍は既に弾幕に包まれて、その姿を明らかにしていない。朝田を反射する弾幕は薩摩軍の姿をおぼろげにする。鳥羽伏見の時もそうだった。弾幕によって敵の姿さえ明らかにならないままで、あの時新撰組は多数の死者を出した。

と。

突然、青龍隊が沈黙した。さつきまで砲を撃ち鳴らし、銃撃を何度も繰り返していたにも拘らず。

え？

新撰組隊士たちのなかにも動搖が広がる。鳥羽伏見を経た隊士たちは顔面を蒼白にしている。かくいう島田もその一人だった。

まさか、もう青龍隊が崩れちまつたんじゃねえだろ？！？

島田の脳裏に、銃によって駆逐されてしまった仲間たちの姿が頭を掠めた。鳥羽伏見で見た地獄。あの時見た光景が、青龍隊に重なる。

敵軍は展開したまま進軍を始めた。道から外れたところにいる兵たちは田に足を浸からせている。そのせいで進軍がままならないらしい。牛歩ながらも敵軍は陣を前進させる。

「ぬ……」

歯噛みする島田。

だが、ここで中島が叫んだ。

「島田さん！ 今が機です！ 今、敵軍は！」

その声によつて、ようやく島田は気づいた。

青龍隊が沈黙したことによつて安心したのか、敵は既に軍を不用意に進めていた。そうして気づけば新撰組の射程内にまで入つていた。

まさか ？

島田は青龍隊の陣を見つめた。

思わず島田は頬を緩める。なるほど、そういうことかい。
ならば。

「中島」

島田は小首をかしげる中島に向いた。

「まだ、機じやねえんだ。機は、奴らが俺たちに背中を見せ始めた
その瞬間。分かつたな」

「まだ、待つんですか」

「ああ」

薩摩軍はじりじりと前進しつづける。銃を構えた歩兵たちの視線は、青龍隊の陣へと釘づけになつてゐる。馬に乗つてゐる将さえ、青龍隊の陣にしか目が行つてゐない。新撰組が伏せている丘になど興味も持つていない。こちらへの威嚇射撃さえも無いところを見ると、まつたくこちらの伏兵を察してゐない。

その敵軍は遂に新撰組に背中を見せた。つまり、会津の用意した陣深く入つてきた。さながら籠に自ら飛び込んだ鳥のように。

「よし！ よく我慢した！ 射撃隊、撃ち方始め！」

瞬間、新撰組の火蓋が切られた。切られたのは火蓋だけではない。ずっと我慢に我慢を重ねさせてきた、隊の殺氣。その封印をも一緒

に切つた。

オオオオオオオオ！

虎の唸りのような鬨が白河の空に突き抜ける。そして、それと共に新撰組の砲も火を噴いた。

「おお！」中島は感嘆の声を上げた。「敵さん、滅茶苦茶混乱しますよ！」

中島の言つ通りだつた。

意識しないところからの攻撃ほど面喰うモノはない。突然（限りなく後方の）側面から銃撃・砲撃されたのだ。敵軍の混乱といつたらなかつた。敵軍は砲の内一台をこちらに向けようとしているようだが、田の中に砲の轍が浸かつてしまつていて到底旋回など出来そうにもない。それどころか、歩兵とて田に足を浸けてしまつていてせいで、身動きが上手く取れないようだ。

しかも。

沈黙していた青龍隊も動き始めた。

さつきまでの沈黙がウソのように、また砲台から砲撃を始めた。今度は精確な狙い。田の泥がはね、敵軍歩兵たちも宙を舞う。

そう。さつきまでの戦運びも全て計算だつたのだ。

青龍隊が囮となつた。わざと砲が敵に当たらないようにした。相手を油断させるためだ。戦下手を演じて見せたのだ。そうとも知らない敵軍は不用意に前進した。これを以つて、新撰組の伏兵が効いたのである。

この作戦には別の意味もある。新撰組を始めとする会津軍には薩摩のように最新鋭の装備はない。新撰組のように、未だ火縄銃を使つてゐる者さえいる。火縄銃と新式銃では射程・威力・連発力いずれにも雲泥の差がある。だが、これだけ敵と密着すれば射程・威力など比べる意味もない。こめかみに突き付けられている拳銃が新しかろうが古からろうが関係がないということだ。それに、運用できる兵力が連発力を補つてくれる。つまり、総合的な実力は互角。ならば陣を敷いて手ぐすねを引いている分、はるかに会津軍の方が有利

なのだ。

そうして完成した二正面作戦。

敵を叩くにおいて、基本的な陣構え。

そして。

棚倉口に陣を構える青龍隊本隊から、一いち方に軍が差し向けられる手筈になつてゐる。つまり、三方向による包囲が完成するということだ。三方向包囲。これには別名がある。それは。

中島は呟いた。

「せ、殲滅包囲」

古今東西の戦において、必勝の構えとされる殲滅包囲。全ての包囲を塞いでしまえば真の意味で殲滅包囲となるが、孫子以来そういつた“完璧な”殲滅包囲は戒められている。完全に囮まれた敵は追い詰められた鼠の如くに噛みついてくる。要は逃げ場があるように見せて安心させつつ、死屍累々の山を作るのである。

なんてこつたい。

島田は心中で呟く。まさか、あの斎藤がこんな戦を描くとはな。どうしても、島田は山口の事をかつての名前、斎藤一と呼んでしまう。だが、京都時代の“斎藤一”と、今ここで戦を描いた“山口一郎”が頭の中で結び付かない。京都時代の斎藤一は確かに卓越した剣客ではあつたが、そこ止まりの男であつた。一個の剣客。かつて島田が斎藤一に持つていた印象はそれ程度のものだつた。だが、会津に入った“山口一郎”には、今までになかつた将としての才がみなぎつていた。会津で新撰組を指揮する山口の顔は、良く見知つた斎藤のそれなのだ。だが。

この戦で、あいつには何かが宿つた。

島田はそう見ている。

だが、戦場でそんな感傷に浸つてゐる暇はない。島田は頭を振つた。

見ると、敵軍は既に崩れかかっている。展開してゐる敵軍の中に片膝をついたり田に突つ伏してゐる兵の姿もある。既に砲兵は狙

撃され、一門ある砲は既に沈黙している。負傷兵が相当出ているようで、薩摩軍のあられのような弾幕も既に散発的なものとなりつつあつた。

既に敵軍は軍の体を為していない。軍の命である指揮系統すらも麻痺しかかっている。

よし！

島田は大音声を発した。

「抜刀部隊！ 敵軍に殺到、殲滅しろ！ 銃撃部隊は抜刀部隊の援護射撃に回れ！」

銃砲火器に身を固めている新撰組ではあるが、やはり一番得意とするのはかつて京の志士たちを震撼させた刀での戦いである。勢い、何らかの方法で白兵戦に持ち込むのが新撰組の戦作法だ。

白兵戦に持ち込めば負けはない。

島田は勝利を確信していた。

そして、その勝利を抜刀部隊の臨時隊長、山口一郎に託した。お前の描いた戦図、お前の手で完成させやがれ。

島田は射撃部隊に檄を飛ばし続けた。

一方、抜刀部隊・山口一郎。

「抜刀部隊！ 敵軍に殺到、殲滅しろ！」

島田の指揮の声がここまで届く。俺なんぞより、奴の方がよっぽど大将に向いている。

まあいい。

「山口局長代理！ 突撃との指示が……」

「ああ、聞こえている。それより、旗を持って」

「はい！」

その隊士の手には、京に居た頃より新撰組を彩ってきた隊の錦旗があつた。赤地に金糸で「誠」と刺繡された隊旗は朝の風にたなびいていた。確かこれは、池田屋や禁門戦争の折の勳功で買い求めたものだ。「新撰組はもう、浪士の集まりではない」。そう言って、

近藤勇が金に糸目もつけずに買わせたものだ。だが、その近藤はもういない。

この旗を振つてきた近藤はもういない。その近藤を支えてきた者たちの多くももういない。だが、俺は。

「戦う」

腰の刀をゆっくりと引き抜いた。数々の苦難を共に超えてきた刀は山口一郎、そして斎藤一自身の鏡映しだった。未だに刃零れひとつない。まだ戦える。そう強がつているかのようだった。

その刀をゆっくりと伸ばし、その切つ先を敵軍に向けた。

「抜刀部隊！ 敵軍に楔を打ち込め！」

オオオオオオ！

味方の鬨の声に圧され、一瀬も前に飛び出した。僅か二十人。だが、火の玉の如くに熱く、苛烈な一团が丘から駆け降りる。

敵軍は既に崩れかかっている。負傷兵を抱えたり介抱したり、あるいは散発的に戦う者の姿はあるが、もう組織的な戦闘は出来ていない。わずか一町ほど先に敵軍がいる。

「撃ち込まれてくる弾丸にだけ注意しろ！ その弾丸を超えるればあとはこちらの勝ちだ！」

だが、その山口の檄も要らぬ心配だった。新撰組の陣からの援護射撃のおかげで、敵軍はこちらに発砲して来ることはない。抜刀部隊と敵軍の距離はもう半町もない。

敵軍がこちらに気付いたのは、四半町に達した頃だった。だが、敵軍の誰もが恐怖の眼差しをこちらに向けるばかりだった。手にある鉄砲のことを忘れてしまつていてるかのように、顔をひきつらせてその場に棒立ちになつていてる。

相手にする必要はない。

既に歩兵たちは兵としての体を為していない。ある意味でただの傍観者と化している。それが証拠に数に劣る僅か二十人の抜刀部隊に恐れをなしている。恐らくは少し脅してやるだけで逃げる。ならば、狙う戦果はただ一つ。

敵将の首。

仮にも一軍を任されているということは、その将は薩長土肥いづれかの出身者だろう。僅か百人程度を率いる将だが、討たれたとあれば向こうにとつて痛手となる。討ち取つておいて損はない。

山口たち抜刀部隊が敵軍に殺到する、まさにその瞬間だった。砲撃の音が白河の空に響いた。

旧式砲の風切り音ではない。明らかに新式のものだ。だが、会津には新式砲の装備はない。あるとすれば敵軍だが、敵軍が持ち込んでいる一門の砲は既に沈黙している。

「なんだ!?」

「報告します!」抜刀隊の一人が言つた。「南方から敵軍! そちらからの発砲と思われます! 現在現在地から六百町辺りにあります!」

「数は?」

「約百!」

そうだった。山口は昨日の斥候の報告を思い出した。確か、敵軍は大田原で軍を二つに分かつた筈。進軍路を同じくしているにも拘らず、である。そのためあまり気にしていなかつたが、敵軍には後詰めもあつた。

「如何しますか?」

「捨て置け!」山口は言つた。「僅か百で何が出来る! それより今は目の前の敵だ!」

「報告!」

「今度は何だ！」

「後方の敵軍、軍を二つに分かつた模様！　五十をその場に残し、五十がこちらに突撃してくる模様！」

ならば逆に好都合ではないか。山口は思った。

この地は新撰組と青龍隊の十字砲火が完成している。敵軍からすればまさに死地。新たな軍が入ってきたところでそれは同じこと。しかも、あと少しすれば棚倉口より青龍隊本隊の兵がやつてくる。殲滅包囲が完成するのだ。飛んで火に入る夏の虫。

そんな山口の肉眼にも、こちらの「火」に飛び込んでくる連中の姿が目に入ってくる。銃を抱えながらやつてくる同じ薩摩の制服の一団。そして、その最前列を率いるは騎兵一騎。どうやらあれが将らしい。どうやら白河に攻め上ってきた将たちは余程死に急いでいるらしい。騎将が歩兵たちの前に立つとは。格好の的ではないか。

だが、そうはならなかつた。

騎兵など格好の的にも拘らず、猛進してくるその将に被弾する様子はない。見ると、どうやら新撰組の鉄砲隊がそちらにまで手が回つていないうらしい。

何をしている、力さん？

だが、すぐに新撰組の鉄砲隊が置かれている状況が分かつた。

六町ほど先に留まっている五十。これがただ留まっているわけではないようだつた。新撰組の控える丘に向かつて発砲を重ねている。そして時折その銃撃が止んだかと思えば砲撃の音が響く。六町先の五十が見事に援護射撃を行なつてているのだ。横殴りに撃ちつけられる弾丸。そして丘を削つていく砲弾。嵐のよつたな射撃のせいで、有効な反撃が出来ていない。それどころか、抜刀部隊への援護も出来ない状況におかれてしまつてているのだ。

やはり、射程が違すぎるか。山口は奥歯を鳴らした。

だが、青龍隊の援護射撃は止んでいない。十字砲火の態勢は崩れかかっているが、まだ動ける。

「進め！」

山口は前に駆け出した。それと共に、足を止めてしまっていた抜刀部隊も前に駆け出す。

ともかく、目指すはこの軍の敵将の首！

二十が錐となり、軍に突き刺さる！とするその瞬間だった。

「総員、軍を退け！」

辺りに竜のいななきのような雷声が鳴り響いた。一声聞いただけで分かる。薩摩訛り。

退く？ 心中でせせら笑う。曲がりなりにもここは死地。それを許すとでも？

錐の最前、山口は敵兵に斬りかかる。このような場で技がどうの間合いがどうのなど意味がない。このような場では、相手を斬り殺さんとする意思の多寡が全てを決める。幾多の戦場を超えてきた山口はそれを知っている。恨み無き相手を憎み、その感情を刀に乗せる。次々に斬る。相手が死んだかどうかなど確認しない。もし殺し損じたのならば後ろの仲間が斬り殺せばよい。そうして二十人による錐は敵の中央、敵将にまで迫った。

そして。

「覚悟！」

踊り上がった山口は刀を振りかぶった。刃が一瞬だけほんのりと光を揺らめかす。そして馬上の将に向かい一撃を。

が。

山口の剣閃はその将に届かなかつた。

山口の剣は、狙っていた将のはるか遠くで止まっていた。豪壮な薩摩拵の刀によつて。

いや、それだけではない。

狙っていた将と山口の間に、騎兵が一人滑り込んでいた。その騎兵が刀を抜き放ち、山口の剣を防いだのであつた。

な、何だと？

山口は自分の剣を止めた騎兵の姿を見据えた。

左目に眼帯をし、馬の上からこちらを見据える細身の男の姿を。その男は、山口に向かい言い放つた。

「川村は殺^やらせもん」

その男の独眼はギラギラと輝いていた。まるで竜の目の如く。

4

その少し前　。

「ちょっとしもた！」

新政府軍前詰百五十の将、川村^ト十郎は己の浅はかさを悔やんでいた。

田の前に広がる戦図。戦の展開はすべて将帥の責任。つまりは将たる川村の責任。川村は一人、目の前に広がる惨状に我が身を焼いていた。

怒りのままに進軍を重ねてしまった。そのせいで「索敵」という基本をおろそかにしてしまった。結果、伏していた敵に気づくことさえできなかつた。前方の丘にてこちらに仕掛けてきた一軍に気を取られるうち、側面左側に伏せていた軍に攻撃される羽目になつてしまつた。川村にさえ分かつた。一正面作戦。これは死地だと。

だからこそ、川村は自分の意地にも掛けて軍を立て直そうとした。そもそも新政府軍は最新鋭の武器をそろえている。負けるはずがないのだ。相手は関ヶ原の頃の武装でやつてくる。だがこちらは世界の霸者・エグレスの兵器たちなのだ。だが、そうはいかなかつた。なぜか関ヶ原の武器たちによつて味方は負傷していく。転回しようとしても田の泥に足を取られて上手くいかない。そうしてオタオタするうちに、川村の命令が上手く兵たちに伝わらなくなつてしまつた。

「こげなこつ、初めてごわす。

そう、軍が自在に動かない。そんなことは軍を率いて初めてのことだつた。今まで自分命令が自在に士卒に届いた。自分の頭通りの動きをしてくれていた。だが、今は違う。暴れ馬の如く統制が

効かない百五十は、何も出来ないままに少しずつ、確実に数を減らされている。いつの間にか砲は沈黙してしまっている。新式銃の銃口から火が噴かない。

しかも、側面の丘から吶喊兵まで出てきた。

しもた！

そう思つたが遅かつた。薩摩の兵にも劣らない勢いと士気の吶喊兵。僅かに二十ほどだった。だが、兵たちはその二十にさえ恐れを抱いているらしかつた。しかも、その二十の後ろではためくのは「誠」の一字が踊る旗。一度でも風雲の京に身を置いていた者ならば知つてゐる。

新撰組の旗！

鳥羽伏見の戦で、新撰組への恐怖は既に粉碎したはずだった。風雲の京を揺らし、尊攘派志士たちを震撼させてきた新撰組の剣への恐怖は、鳥羽伏見でばら撒いた銃弾によつて確かにぬぐい取つたはずだつた。だが、こうして揺らめく新撰組の旗は川村に本質的な恐怖を迫つてくる。馬上の川村でさえそうなのだから、士卒たちの恐怖はさらに上をいくだらう。

「なんてこつ……なんて……」

確かにその瞬間、川村の思考が止まつてゐた。

と、その瞬間だつた。

川村の耳に、天の助けの知らせが響いた。

新式砲の砲音。そして刹那遅れ、側面の丘に着弾した。

あいは！

思わず川村は後ろを見やる。

おお！

川村は安堵の声を上げた。

六町ほど後方に見える、百ほどの軍勢。間違いなく、伊地知軍本隊だ。

しかも、伊地知軍はこちらに兵を指し向けてくれている。五十ほどはその場に残して側面部隊への抑えとして用い、残り五十がこち

らに向かってくれている。

助かりもした！ これでまだ戦えもす！

川村は突撃してくる伊地知軍に向かつて手を振りたい気分だった。だが、仮にも戦場でそれをすることは出来ない。

やがて近づいてくるに従い、川村の目にもこすりにやつてくる五十人の様子が見えてくる。だが、その姿は川村の想像したものとはずいぶんかけ離れていた。

なんと、将たる伊地知が最前列にいる。馬を飛ばしてこすりにやつてくる。もはや馬が速過ぎて歩兵たちが追いつけていない。軍を率いる将としてやつてはならない進軍。

どうしたのでもすか？

困惑を隠せない。

伊地知にはありえない。薩摩一の軍略通にして薩摩の将たちを育てた伊地知竜右衛門の行軍とは思えない。

やがて、伊地知一騎が本隊とすっかり離れてしまった。一騎駆けにこちらにまで迫つてくる。無論、無謀だ。増援のおかげで側面丘陵上からの銃撃はないが、未だに正面の丘陵からは砲撃や銃撃があるのだ。

だが、川村を驚かせたのはむしろ伊地知の表情だった。しんと顔を青白く染めて、馬に鞭をくれている。長年伊地知を見てきた川村でさえ、このような表情を浮かべる伊地知を見るのは初めての事だつた。

「い、伊地知どん」

川村の言葉に応えることなく、川村の軍に到着した伊地知はがなり立てた。

「総員、軍を退け！」

「え？」川村の思考はまた凍つた。

何も、凍りついたのは川村だけではない。一五〇の軍すべてが凍りついた。

馬をなだめながら、伊地知はまた叫ぶ。

「軍を退け！ 与十郎！」伊地知は川村に向いた。「分からんか、この状況！ 側面丘陵、前方丘陵に敵軍。ここにもし敵の援軍が来たらどうなる？」

促されるがまま、頭の中に戦図を描いてみる。左側方に敵軍。そして前方に敵軍。その二軍に挟まれて、事実上の二正面作戦となっている。その上さらに、敵援軍があつたなら……。

ようやくながら川村は気づいた。

三方面包囲が完成する。

左側面、正面に軍が展開している状況なら、右側面に軍を配置するのには目に見えている。そうなれば、劣勢は何があつても覆せない。

「分かつたか！ 分かつたら早く……」

川村が慌てて退却指示を出そうとした瞬間、味方陣形の端から悲鳴が上がった。だがそれは、さっきまで自軍が上げていた悲鳴とは明らかに種類が違う。その悲鳴を、かつて川村は嫌というほど聞いてきた。これは、刀で切りつけられた時に人が発する声。

声の方を見ると、やはりその想像通りの事が起こっていた。

自軍の左翼が敵軍呐喊兵によつて切り裂かれている。鋭い嘴のような陣を取つた呐喊兵たちは狼のような咆哮を上げこちらの軍の陣形を崩していく。揺れる「誠」の旗がいともたやすくこちらに近づいてくる。

そして。

「覚悟！」

ついに、嘴の最前にいた兵が、川村の目前にまで達した。白刃を八相に構えるその兵は、馬上の川村に向かつて飛ぶ。その間に手に在る刀を振り上げて。

「な」

馬上ではとつさの働きが難しい。川村も一瞬の事にたじろぎ、逃げることも防ぐことも叶わない。川村からすれば必死の刹那、刺客からすれば必殺の刹那。川村の眼前で生死が交錯した。

だが。

その川村の前に、伊地知が踊り出た。

馬の腹を左足で蹴り上げながらも腰の刀を抜き放ち、刺客の刀に合わせた。伸びる剣閃、それはまさしく、薩摩の剛剣・薬丸自顯流の抜刀技、“抜き”だつた。下から伸びる剣閃が振り下ろされる刺客の刀と交差し、一瞬火花を散らせた。

「川村は殺らせもはん」

刀を抜き放つた伊地知は確かにそう言つた。小さな体を楯にしながら川村の前に立つ伊地知の背中は、本当に大きかった。

だが、その刺客は止まらなかつた。

声もなく刺客は動いた。必殺の剣閃をし損じたと知るや、ぐんとその身をかがめて伊地知の死角に回り、そこから突きを放つた。足の発条がよく利いた突きは唸りを上げて伊地知に迫る。だが、これは“地の利”が伊地知を助けた。馬に乗つていたおかげで、刺客の剣先は伊地知の鼻先をかすめただけだつた。

ちつ！

伊地知はその場で馬を旋回させて刺客を牽制し、味方全軍に向かい叫んだ。

「全軍、退避！ 退避！」

その伊地知の言葉によつて、ようやく味方の軍たちは今自分が置かれた状況に気付いたらしかつた。銃を構えていた兵はその銃口を地面に向け、名残惜しげに白河城を望むや唇を噛んで背中を見せた。敵弾に倒れた仲間を看護していた者は、仲間を背負いながらその戦場から離れんとした。そうして一人、また一人と背中を見せ始める。だが、川村に切りつけてきた刺客は叫んだ。

「させるか！ 抜刀部隊！ 追いすがれ！」

どうやらこの刺客、ただの一兵卒ではないようだ。たかが一兵卒の命令に、後ろの隊士たちが意を同じくして従う。もしかすると、この男が抜刀部隊の長なのかもしない。

だが、その刺客以上の大声で伊地知が命令を下した。

「退却援護！ 敵軍を囮め！」

そう、伊地知が一緒に連れてきた五十に対する命令だった。伊地知の命を聞いた五十は、呐喊しながらも一手に分かれ、左翼を打ち崩さんとしている敵軍を囮みに入った。追いすがるところではない。敵軍はその五十の相手をすることとなつた。

戦闘の疲れがない伊地知率いる五十はよく動いた。それのみではない。数以上の働きを見せた。だが敵軍も負けてはいない。後退しながらも兵は減っていないようだ。つまり、ここで膠着が起こつた。だが、結果としてそれが時間稼ぎとなつた。その間に川村軍のほとんどが敗走の態勢に入つた。

その様を見届けた伊地知は馬を南に旋回させた。

「総員退避。五十は殿！ 心してつとめい！」

殿。つまりは退避の際に敵の追撃をかわす役割を負つた兵たちの事である。追撃を仕掛けてくる敵ほど厄介なものはない。勝利の勢いをまとつたまま、猛り狂つた熊のように迫つてくる。敵が僅か二十とはいえ、その勢いは馬鹿に出来ない。それが証拠に、こちらの精兵五十に対して敵軍二十がよく持ちこたえている。勝利を目前にぶら下げられて勢いついている証拠だ。追撃戦において、殿が崩れて本隊まで崩れてしまつた例など枚挙にいとまがない。

だが、その難しいはずの退却戦の中で、伊地知は笑つて見せた。独眼の眼は、さつき川村に斬りかかつたあの刺客に向いていた。

「また会いもんぞ。今度は借りを返しもす」

刺客の男もまた、にやりと笑つて見せた。
やれるものならやつてみる。
そう言いたげに。

ふん。

鼻を鳴らした伊地知はぼけっと戦場を見下ろす川村に向いた。

「退避。ほれ、ぼさつとすな」

「は、はい」

川村もまた、白河城に背中を見せた。

その瞬間だつた。側面丘陵、前面丘陵から歓声が湧いた。地響きのようになに聞こえる男たちの歓喜の声。川村からすれば屈辱の声。まるで雨のようになに降りしきる声は、川村の心をみじめに濡らす。

思わず、川村は振り返ろうとした。だが、それを伊地知は咎めた。

「退避するときは他のこつを考えんほうが良か」

しばらくしてから、伊地知は続けた。

「今は耐える。まだ俺たちは負けておらん」

いや、これは負けでしかない。川村は唇を噛んだ。新政府軍の精銳一五〇を与えられながら、薩摩の軍師・伊地知竜右衛門率いる兵の六割を任せられたにも拘らず、敵にもてあそばれた揚句撤退の憂き目にあつた。負けた。その事実は揺るがしようがなかつた。

その後、伊地知軍は何度も敵軍の追撃にあつた。だがそのたびに伊地知の殿軍指示により追撃をかわしまくつた。僅か百の殿はその倍を超える追撃軍を何とか押し留めることに成功した。そうして敵軍が追撃を諦めた頃には、士卒始め皆疲れ果て、とても戦闘が出来る状況に無かつた。

こうして、四月二十五日の戦闘は終わりを告げた。

新政府軍の敗北。白河城を奪われた上での、さらに恥の上塗りであつた。

白河から離れたところに陣を張つた伊地知軍は、現在の頭数を確認した。やはり、頭数が減つていた。一五〇いたはずの人員が三十人ほど減つていた。逃げ出して戻つてこなかつた者もあるだろうが、殆どは死者、あるいは大けがを負つて戦列から離れた者だろう。さらに、残つた人員の内、怪我人が三十人を超えていた。かすり傷程度の軽い傷ならば全員が受けている。もはや数えるまでもなかつた。

軍の士氣は最低にまで落ち込んでいた。

まるで亡国に際してしまったかのように肩を落とす者、虚ろな目をして地面に座っている者、けが人を介抱しながら眼の下に隈を作っている者。軍の中に広がる倦怠感、そして絶望感。

川村与十郎はこの感覚に覚えがあった。かつて、薩摩がエグレスと一戦を交えたことがあった。まるで勝負にならず、薩摩は負けに負けた。その負け戦の時に、薩摩の中に流れた空気がまさにこの空気だつた。洞窟の中に生き埋めになったかのように詰まる鳥。出口の見えないもどかしさから苛立ちが湧きおこる。そして、自分の力ではどうしようもないほどの絶望が圧し掛かつてくる。そしてさまざまな感情がないまぜとなつて黒い炎となつて立ち上り、各人の身を完膚なきまでに焼きつくす。

これまで、伊地知軍は勝ち��きだつた。

鳥羽伏見での戦いでは数の劣勢を跳ね返した。甲州では敵軍を子供同然に捻り潰した。その威に恐れをなした旧幕府・徳川家は干戈を交えることなく朝廷に屈した。そして宇都宮城さえも一気に下した。

勝ちに慣れ、酔つていた。

そこに来ての、敗北。それだけに痛い。

もちろん川村とて例外ではない。いや、むしろ他の兵たちよりもはるかに痛みを感じている一人だつた。

“俺がこの最強の軍にミソをつけてしもつた”

その言葉が川村の中でぐるぐると回り続ける。その言葉を振り払うように川村は何度も頭を振つた。だが、頭を振れば振るほど胸が押しつぶされるような感覚に襲われる。

「畜生」

川村が歯噛みした、その瞬間だつた。

「おお、そげに怖か顔をすうな」

その声に川村は振り返った。振り返った川村の視線の先には伊地知が立っていた。

伊地知は無表情だつた。元々鍔の眼帯をしているおかげであまり顔の表情が出にくい。普段なら開いている右目が伊地知の感情を代弁するはずなのに、今ここにいる伊地知からはいかなる心の細波を感じない。

歌うような口調で伊地知は続けた。どこかひょうひょうとして清々しげに。

「死人・逃散二七。この戦、大負けだな」

軍隊において総数の一割もの死者が出てしまつと軍としての体をなさなくなる。死んだ人間の倍は怪我人が出る。そしてその三倍、疲れをまとつた兵たちが溢れる。現在、戦うことはとてもできない。伊地知の言葉の裏に在るもの。それは現在の伊地知軍が軍としての体をなしていないことを如実に表していた。

「今、江戸に向けて手紙を書いた」と伊地知。「“もつと兵隊を送つてくれもんせ”つてな」

伊地知の言葉には、戦に負けたという悲壮感がない。

「伊地知どん、俺は何を間違うておつたのでしよう。教えてくれりゃんせ」

最初、伊地知は何も答えなかつた。地面上に転がる石を右手の杖の先でもてあそんでいた。だが、意を決したようにその小石を思い切り扱つた。石はころころと転がつて草むらの中に消えた。

「与十郎、お前はこの戦の“質”を見損なつておつたんだ」

「“質”？」

「鳥羽伏見から江戸までの戦は、言うなれば意地の戦じやつた」
意地。その意味を先回りしようとしたものの、川村にはその言葉の意味が分からなかつた。“意地”という言葉はわかる。だが、伊地知がどういう意味を以つてその言葉を選んだのかがさっぱり分からぬ。

伊地知は続けた。

「鳥羽伏見から江戸までの戦。あれはつまるところ徳川幕府の意地じゃったんではなかか。かつて日本中の大名を屈服させ、武門の第一位として天下を睨んでいた徳川家の矜持、じゃつたんではあつまいか？天下を三百年も治めてきた徳川家が干戈を交えることなしに負けられない。そういう徳川の、ひいては徳川に寄りかかっている者たちの意地が、鳥羽伏見から江戸までの戦の中核をなしていたのではなかか」

「武家の意地。徳川家の意地。

思えばそうかもしだれなかつた。

鳥羽伏見の時点で、徳川幕府は既に存在しなかつた。だが敵軍は“徳川幕府”という旗印のもとに結集した。そして、江戸までの戦いは“徳川幕府”という旗を掲げる者たちとの戦いだつた。

「じゃつどん、これから戦は違つ

「どう違つていうのですか」

「これまでの戦は意地の戦じゃ。じゃつどん、意地なんてもん、数の多寡と兵の強弱ですぐに折れるもんじゃ。事実、鳥羽伏見や甲州で俺どんは負けることはなかつた」

「じゃあ伊地知どん、これから戦はどげな戦でござますか？」

伊地知は腕を組んで、遠く北を睨んだ。その視線の先は、はるか北に控えている白河の地、そして会津兵が控える白河城を捉えているのだろうか。短く息を吐いた伊地知は、ぼそりと、だが力強く言ひ放つた。

「敵にとつて白河から北の戦は、自分の国を守る戦だ」

「国を守る戦？」

「ああ。己の育つた国を。禄を貰う殿の治める国を。そして妻や子のいる国を。そして、自分が帰るところである国を守る戦になつた」

言つてみればそうだった。これまで、鳥羽伏見から江戸までの戦にはその悲壯がなかつた。鳥羽伏見の時は敵も味方も自分の故郷が関わらないところで戦つた。甲州での戦とて、甲州には縁もゆか

りもない連中との戦いだった。川村は気づいた。まだ自分は国を背後に背負つて戦う敵に遭遇してこなかつたと。

伊地知は一つ頷いた。

「雀を庭先で追い払うのは造作もないこと。じゃつどん、雀の巣をつつけば、如何に雀は弱いとて攻撃を止めん。それと同じことじや」淡々と言葉を述べる伊地知に、川村は反感を覚えた。こんなにも冷静に戦を語る目の前の男に違和を抱き始めていた。

だが、伊地知の組まれた手に目が向かつた瞬間、川村は喉から出かかつていた言葉を飲み込まざるを得なかつた。組まれている伊地知の腕。その腕に、伊地知の指が思い切り食い込んでいた。両の二の腕を握りながら、肩を震わす伊地知。無表情だったが、その独眼の奥に黒い炎がくすぶつっていたのは川村の見間違いではない。

伊地知は口を開いた。

「与十郎。こん戦、必ず勝ちもんぞ。緒戦の敗北は俺のせいじゃ。

つけられたミソは俺が力タをつけん」

「いや、そいは違うもんぞ！ 緒戦の敗北は俺・川村与十郎の」

「いや」伊地知は苦々しげにつぶやいた。「最初から百五十では白河城は落ちんと思っておつた。じゃつどん、俺はお前を押し留めることが出来んかった。そいは俺の責任じや」

「そいを言つなら、無謀に兵を進めたのは俺でござわす」

「そか。なら、俺どん二人の責任ということで良かか？ なら、二人の責任において、任務を全うしもんぞ。与十郎、白河城は俺どんで落とすぞ」

川村もまた北の空に向いた。ガリ、と歯の奥を噛みしめながら、川村もまた伊地知の言葉に頷いた。

次は破る。何としても国を守ろうとする強情なる心」と。

万丈の気焰を吐きながらその場に立つ川村の姿を、伊地知はその独眼に納めていた。

江戸総督府に飛び込んできた伝令は、白河戦線での無様な敗北を告げた。四月二十五日の夕方に入ってきた知らせは総督府を駆け巡った。

「伊地知將軍率いる一五〇、白河戦線にて敗走！　被害は甚大！」
また遅れて情報が入つてくる。

「伊地知將軍ならびに川村副官は無事との由！　が、兵力消耗著しいとの事！」

「白河戦線兵、二十余名が死亡！　倍する数が負傷との事！」

最初、報告たちに際した西郷吉之助は、眉根一つ動かさなかつた。だが、飛び込んでくる情報が旗色の悪さを伝えるにつれ額に手をあてがつた。悪夢でも見たかのような表情を浮かべ、苦々しげにつぶやいた。

「ちょっともたあ

しまつた、どこの騒ぎではない。

派兵したうちの一割が死に、一割が負傷した。つまりは軍全体の三割が兵隊としての活動が出来ないということだ。三割の兵が動けぬ軍など、もはや軍ではない。つまり、伊地知軍一五〇は一日にしてほぼ壊滅といつてもいい大敗北を喫したことになる。そして、これほどの敗北を経験したことが新政府軍にはなかつた。

伝令兵を下がらせた後、西郷は横に座る大村益次郎に向いた。

「大村どん……お聞きになられもしたか」

「ええ、聞いてますよ」

戦場から送られてくる報告書の束の端をそろえながら、大村は答えた。大村の目の前にある報告書には、越中での戦線の好調ぶりと、白河戦線での苦境が見事に対照をなしていた。

「ことがここに至つてしまつたら、あとはもう決断するしかありもはん！」

「と、言いますと？」

「決まつております」西郷は言つた。「関東の軍を結集し、白河を落とすほかありもはん！」

馬鹿か。大村は心の中で毒づく。

未だ関東の平定はなっていない。といふことで散発的に起こる親徳川家の武士連中との小競り合い。さらに、未だ江戸には彰義隊がいる。既にその数は三千を超しているという。しかも穩健派が去ってしまったことにより、彰義隊はいつ暴発してもおかしくないところにまで来ている。そのような状況で関東から派兵などしたら何が起こるか。そんなこと、火を見るよりも明らかだ。

白河まで攻め上がるまではいいだろうが、北は会津、南は彰義隊に挟まれることになる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6841x/>

竜の人～伊地知竜右衛門異聞～

2011年11月30日20時52分発行